

第5節 第4次調査

(1) 調査の概要

台地の北端に近い部分、約640mを調査した。調査した遺構は竪穴建物21基、土坑9基である。



第70図 4次区遺構配置図

(2) 遺構と遺物

竪穴建物

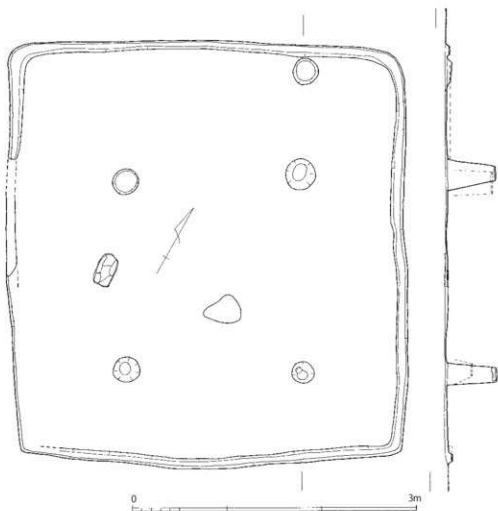
1) 1号竪穴建物
(第71図)

調査区中央の西側に拡張した部分で確認された竪穴建物で、2号竪穴建物を切っている。南北4.54m、東西4.24mのやや長方形を呈し、壁はほとんど残存していない。南西部を除いて幅約0.1m、深さ数cmの壁溝が廻る。床面中央やや南寄りには、直径0.3mほどの焼土が確認されたので、地床炉と考えられる。支柱穴は四カ所である。

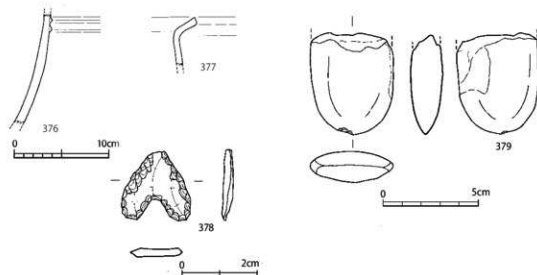
図示できる出土遺物は4点である。第72図376は胴部に二条の断面三角形の突帯を廻らせる安国寺式土器

甕、377は「く」字形に開く口縁部の寛、378はチャート製の打製石鏃、379は蛇紋岩製の磨製石斧である。

この建物の時期はⅥ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第71図 4次1号竪穴建物



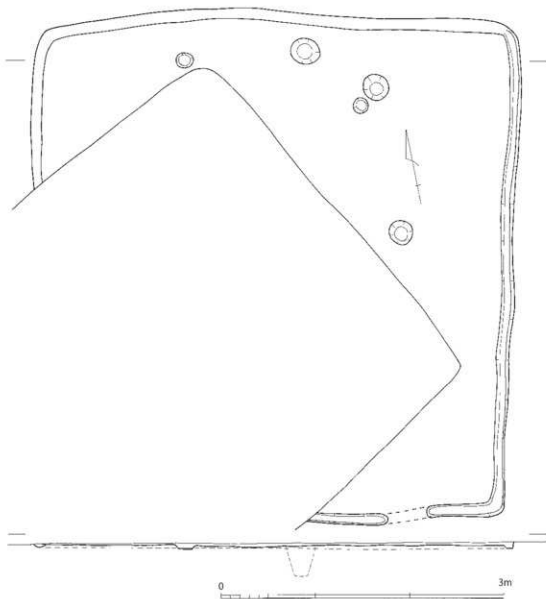
第72図 4次1号竪穴建物出土遺物

2) 2号竪穴建物(第73図)

調査区中央の西側に拉張した部分で確認された竪穴建物で、1号竪穴建物に切られている。南北5.35m、東西5.16mのやや長方形で、幅約0.1m、深さ数cmの壁溝が廻る。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴になるものは不明である。炉跡も確認できなかった。

図示できる出土遺物は2点である。第74図380は頸部下に突帯を二条廻らせる安国寺式土器壺、381は石英製の打製石鏃である。

この建物の時期を380が示すとすれば、Ⅵ期(後期前葉)からⅦ期(後期中葉)と考えられる。



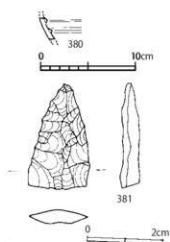
第73図 4次2号竪穴建物

3) 3号竪穴建物 (第75図)

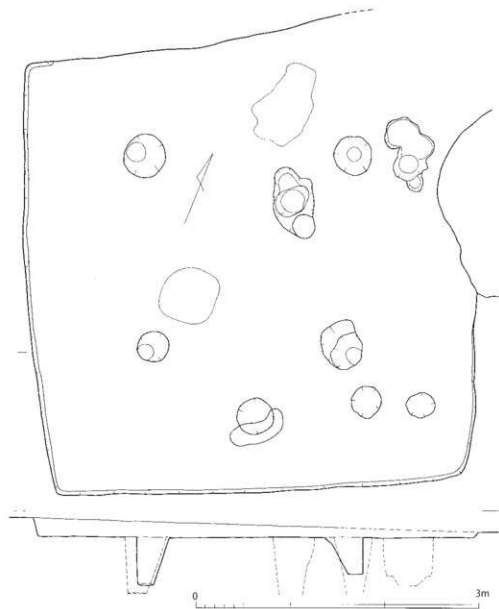
調査区南西角付近で検出された、一辺4.6mのほぼ正方形を呈する竪穴建物である。壁はほとんど残っていない。4号と6号竪穴建物を切っている。床面には四カ所の主柱穴があり、2本の南側主柱の南壁際には焼土が確認されたが、位置から考えて炉ではないであろう。むしろ、南西主柱穴の北側にある炭化物が充填した浅い土坑が炉の可能性はある。

図示できる出土遺物は7点である。第76図382は頸部下に三条の突起を廻らせ、その最下段に勾玉状の浮文を付す安国寺式土器壺である。383と384は平底の壺底部。385は長胴の甕である。386は鉄製の鎌で、基部(右側)に折り返しがある。387は緑泥片岩製の磨製石鎌、388はダイサイト製の砥石である。

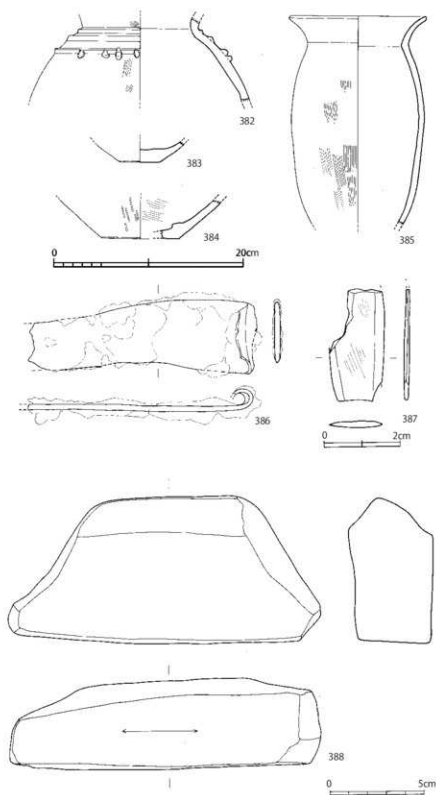
この竪穴建物の時期はⅦ期(後期中葉)であると考えられる。



第74図 4次2号竪穴建物出土遺物



第75図 4次3号竪穴建物



第76図 4次3号竪穴建物出土遺物

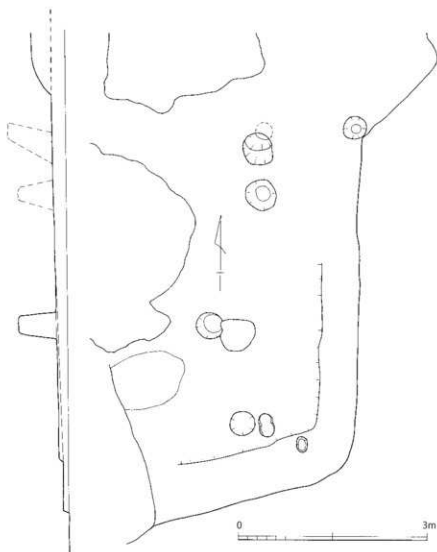
4) 4号竪穴建物 (第77図)

3号竪穴建物に切られている竪穴建物であるが、削平を受けており全形は不明である。7号竪穴建物との切り合い関係は不明である。また17号土坑を切っている。床面からは焼土と炭化物のまとまりが検出されているが、灰ではないであろう。柱穴も数カ所を確認されているが、主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は2点である。第78図389は櫛描波状文を施す安国寺式土器密の口縁部、390は平底をな

すと思われる窓の裾部。

わずかな出土遺物ではあるが、この堅穴の時期はⅥ期（後期前葉）からⅧ期（後期後葉）に納まる。

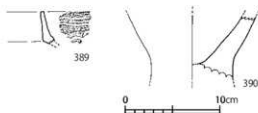


第77図 4次4号堅穴建物

5) 5号堅穴建物 (第79図)

調査区中央やや西寄りで確認された、円形を呈する堅穴建物である。削平を受けて壁はほとんど残っていない。また、壁から0.7mほど内側では床面が数cm低くなっている。この建物に伴う主柱穴や炉は確認できなかった。

図示できる出土遺物は1点で、第80図391は外反しながら開く窓の口縁部である。時期は弥生時代後期としかわからない。

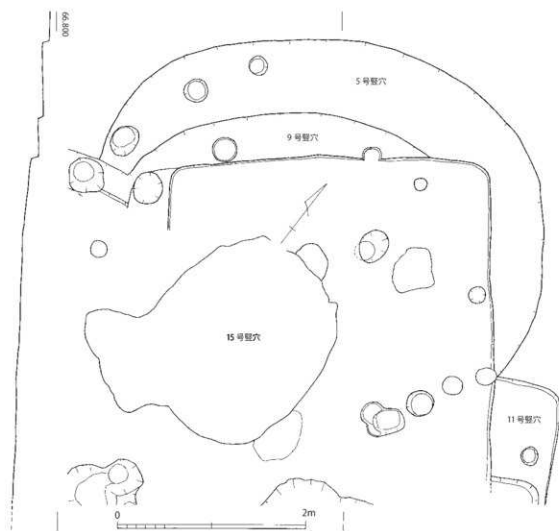


第78図 4次4号堅穴建物出土遺物

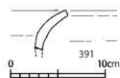
6) 6号堅穴建物 (第81図)

3号堅穴建物に切られ、5号堅穴建物を切る隅丸方形の堅穴建物である。10号堅穴建物との切り合い関係は、上部の削平のため確認できなかった。また、12号土坑から切られている。この建物に伴う主柱穴や炉は確認できなかった。

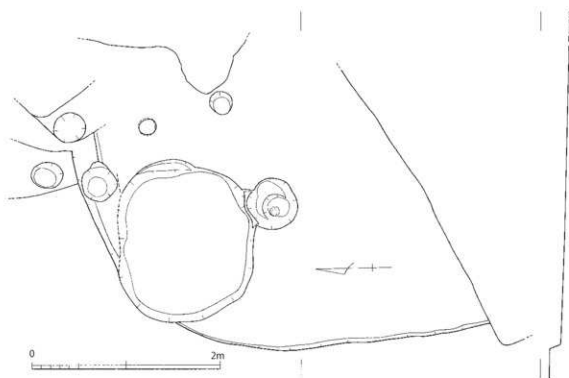
図示できる出土遺物は1点で、第82図392は胴部に二条の断面三角形の突帯を廻らせる安国寺式土器甕で、時期は弥生時代後期としかわからない。



第79图 4次5、9、10号竖穴建物



第80图 4次5号竖穴建物出土遗物

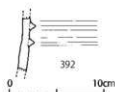


第81図 4次6号竪穴建物

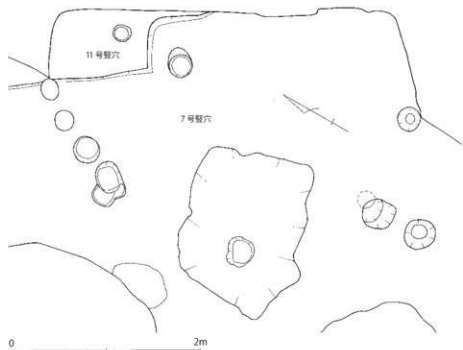
7) 7号竪穴建物 (第83図)

調査区はほぼ中央で確認された竪穴建物で、11号竪穴建物を切っている。しかしながら、4号や10号竪穴建物との切り合い関係は、上部の削平のために確認できなかった。規模は、残存している南北方向で3.75mと小規模である。この建物に伴う主柱穴や炉は確認できなかった。

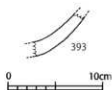
図示できる出土遺物は1点で、第83図393はやや平底気味の丸底をなす壺。時期はⅨ期(弥生時代終末)前後か。



第82図 4次6号竪穴建物出土遺物



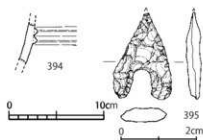
第83図 4次7, 11号竪穴建物と7号竪穴建物出土遺物



8) 8号竪穴建物

調査区の南東側で確認された遺構で、削平のため壁はごく一部しか残存していなかったが、遺物の出土状況や焼土などから竪穴建物と考えた。規模や形状などは不明である。焼土は南北2.7m、東西1.5mの範囲に広がっており、焼失建物だった可能性もある。

図示できる遺物は2点で、第84図394はやや丸みを帯びた断面三角形の突帯を二条廻らせる安国寺式土器壺である。395はチャート製の打製石鏃である。時期は394から弥生時代後期としか言えない。



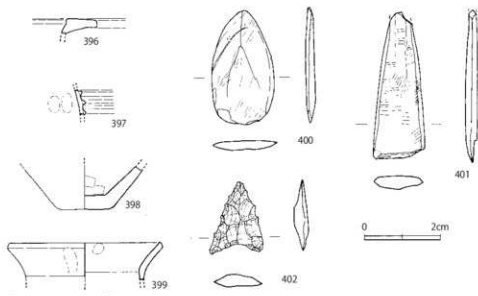
第84図 4次8号竪穴建物出土遺物

9) 10号竪穴建物 (第79図)

調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、5号と11号竪穴建物を切っており、6号や7号竪穴建物と切り合い関係を有するものの、削平のため先後関係は確認できなかった。規模は、略東西方向で3.35m、略南北方向は $3.4 + a$ mである。残存する深さは、検出面から約0.27mである。また15号土坑を切っている。床面には2か所で焼土の広がりを確認したが、印跡かどうかは不明である。また、南側では炭化物の広がりを確認している。

図示できる出土遺物は7点である。第85図396は口縁部が鋤先状を呈す壺、397は三条の突帯を持壺、398は平底の壺底部、399は「く」字形に折れる甕の口縁部である。400は緑泥片岩製の、401は粘板岩製の磨製石鏃である。402は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この竪穴建物の時期は、399の存在から後期中葉以降と考えるが、細かな時期は不明である。

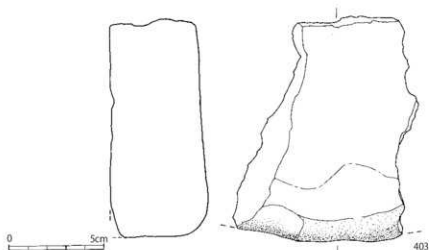


第85図 4次10号竪穴建物出土遺物

10) 11号竪穴建物 (第83図)

調査区南東角部で確認された遺構で、大部分が調査区外のため全形は不明である。明確な角部を有することから方形基調の竪穴建物であろう。

図示できる出土遺物は1点のみで、第86図403は輝石安山岩製の台石である。



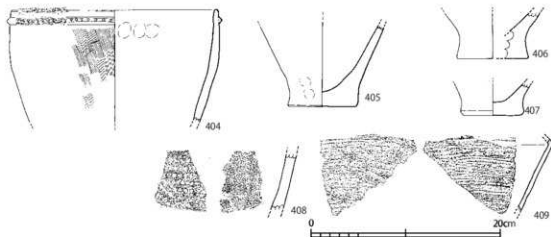
第86図 4次11号竪穴建物出土遺物

11) 16号竪穴建物 (第88図)

調査区の東端のやや南寄りで検出された竪穴建物で、27号竪穴建物と切り合い関係を有するが、上部の削平のために先後関係は確認できなかった。また、32号土坑を切っている。東側半分ほどは調査区外のため、東西方向の規模はわからないが、南北は5.0mである。北側半分には深さ0.05mほどの壁溝が廻る。床面には多くのピットがあるが、支柱穴と思われるものは確認できなかった。床面には焼土や炭化物の広がりも確認できなかった。

図示できる出土遺物は6点である。第87図404はやや内湾気味に立ち上がる下城式土器甕で、一条の刻目突帯を廻らせる。405から407は平底の甕底部。408は縄文時代早期の燃糸文土器、409は縄文時代晩期の条痕文土器である。

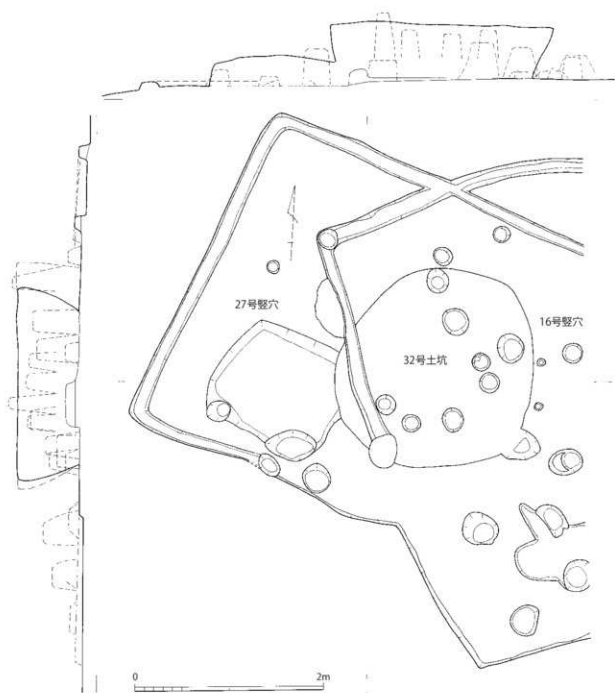
図示した出土遺物は縄文土器を除くと弥生時代中期のものであるが、竪穴の形状が方形であり、時期は弥生時代後期に下るものと考えられる。



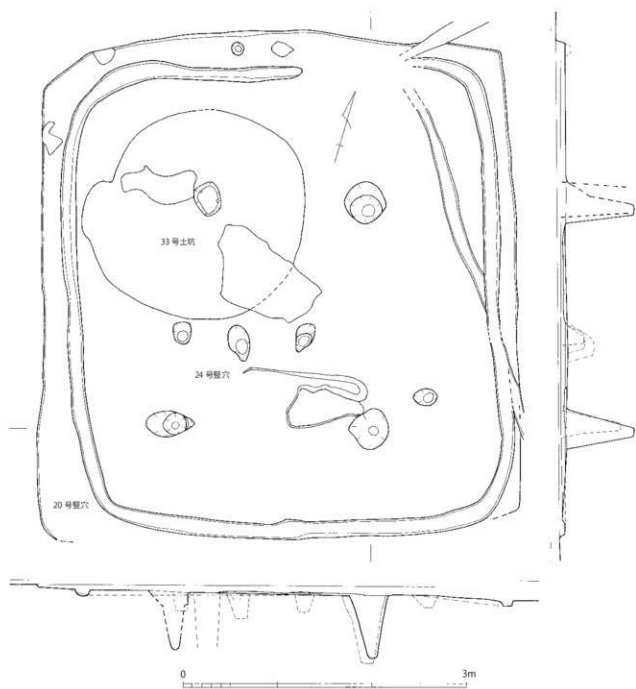
第87図 4次16号竪穴建物出土遺物

12) 20号・24号竪穴建物 (第89図)

調査区中央やや北寄りで確認された竪穴建物で、第20号竪穴建物は南北5.50m、東西5.05mのやや長方形を呈し、第24号竪穴建物は南北5.00m、東西4.45mのやや長方形を呈する。この二つの竪穴建物はほぼ相似形に重なっており、調査時の所見では20号竪穴建物は24号竪穴建物の拡張としている。24号竪穴建物は壁溝しか残っておらず、その壁溝は21号竪穴建物の壁溝を切っている。また、24号土坑を切っている。床面には焼土が点在しており、床面からは多量のイチイガシと考えられる炭化物が出土した。支柱穴は四カ所で、中央に1.2m × 0.7mの浅い土坑があり、焼土が堆積していたので炉と考えられる。



第88図 4次16, 27号竪穴建物

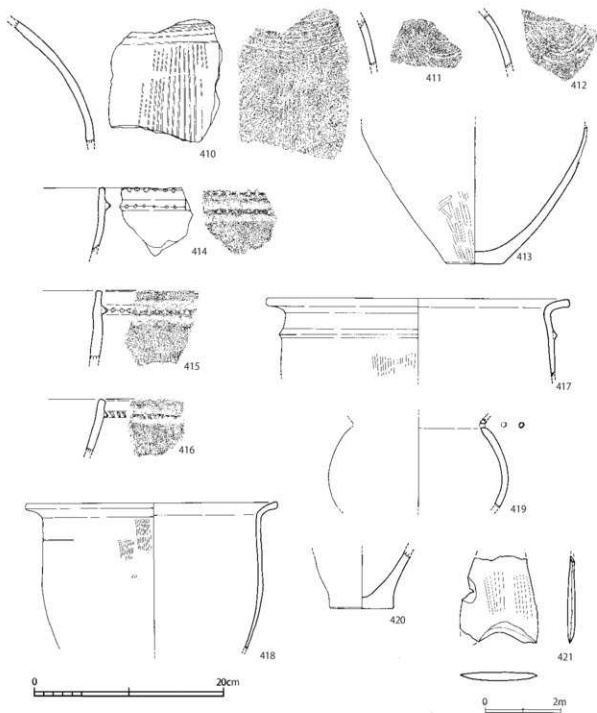


第89図 4次20、24号壁穴建物

図示できる出土遺物は12点である。第90図410から412は半裁竹管で半円形や直線文を描く下城式土器壺、414から416は口縁部に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。417は曲線的に屈曲し聞く口縁部下に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の甕、418も口縁端部が若干肥厚する東北部九州系の甕である。419は頸部に2つ一組の穿孔を持つ壺、420は平底の壺底部である。421は緑泥片岩製の磨製石鏃である。

出土遺物は中期前半のものであるが、しっかりした四本柱の方形建物であることを考えれば、竪穴建物の時期は後期と考えざるを得ない。

なお、「20号住居 pit」として取り上げている資料(411、412、415、416、418)は、後述する33号土坑出土資料である可能性が高い。



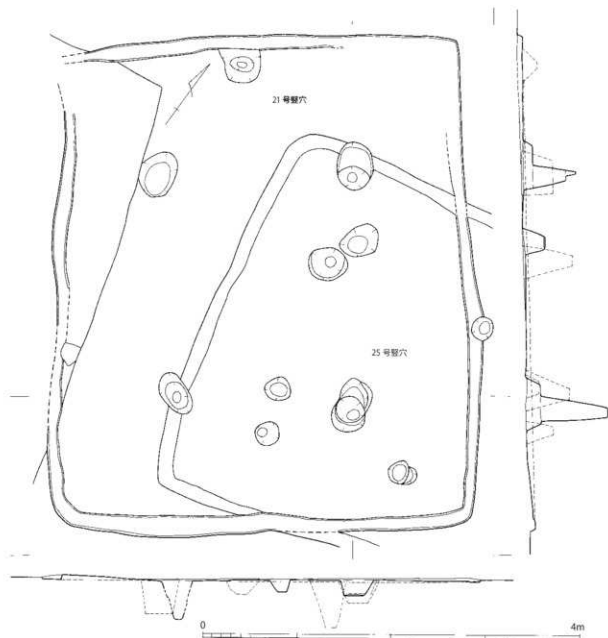
第90図 4次20号竪穴建物出土遺物

13) 21号竪穴建物（第91図）

調査区中央北側で確認された竪穴建物で、南北5.00m、東西4.45mの長方形を呈し、24号竪穴建物に切られている。25号竪穴建物とも切り合い関係を有するが、削平により先後関係は確認できなかった。壁は残存しておらず、幅0.15m前後の浅い壁溝が残るのみである。支柱穴は四カ所確認された。ほぼ中央でわずかに焼土が確認されたので、炉跡と考えられる。

図示できる出土遺物は3点である。第92図422は脚が付く鉢、423は甕の口縁部である。424はサヌカイト製の打製石鏃である。

建物時期は、423の甕口縁部から弥生時代後期と考えられる。



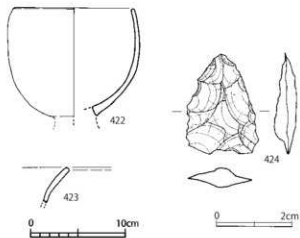
第91図 4次21号竪穴建物

14) 22号竪穴建物(第93図)

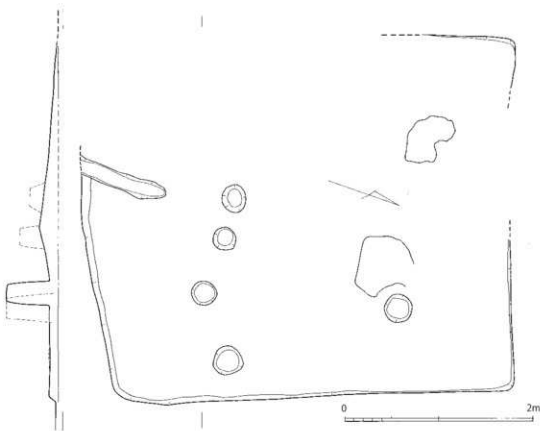
調査区北西部で確認された竪穴建物で、23号竪穴建物と切り合い関係を有するが、上部の削平のため先後関係は確認できなかった。南北4.43m、東西3.80mの長方形で、南側は壁が約0.2m残るが、北側は完全に削平を受けていた。床面には焼土が二カ所で確認されたが、灰とは確認できなかった。柱穴は5カ所あったが、主柱穴は確認できなかった。

図示できる出土遺物は2点である。第94図425は僅かに上げ底状を呈する壺の底部。426はサヌカイト製の打製石鏃である。

出土遺物が少なく時期比定が難しいが、竪穴プランが方形基調なので、後期の可能性が高い。



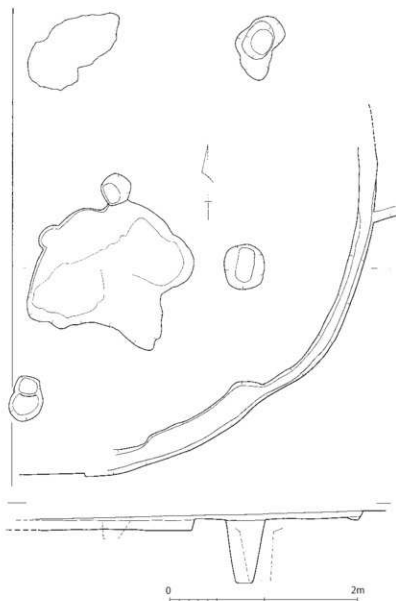
第92図 4次21号竪穴建物出土遺物



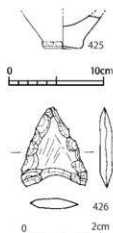
第93図 4次22号竪穴建物

15) 23号堅穴建物 (第95図)

調査区北西部で確認された堅穴建物で、22号堅穴建物と切り合い関係を有するが、上部の削平のため先後関係は確認できなかった。円形に廻る壕溝が確認されたので、円形堅穴建物と考えられる。床面には直径約1.3mの不定形の土坑があり、炭化物が堆積していた。柱穴も数カ所で確認されたが、支柱穴と考えられるものはない。



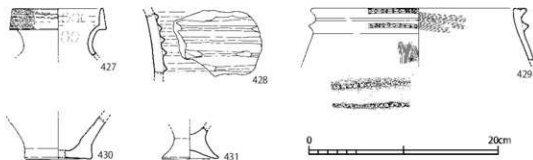
第95図 4次23号堅穴建物



第94図 4次22号堅穴建物出土遺物

図示できる出土遺物は5点である。第96図427は口縁部上半に柳描波状文を施文する安国寺式土器壺、428は断面がやや台形気味の突帯が5条廻る壺の胴部破片。安国寺式土器壺ではない。429は口唇部と直下に二条の刻目突帯を廻らせる甕で、口縁部は内傾する。下城式土器の一種であろう。430は平底の甕底部、431は鉢の脚と考えられる。

以上から、この堅穴建物の時期はVI期(後期前葉)からVII期(後期中葉)と考えられる。



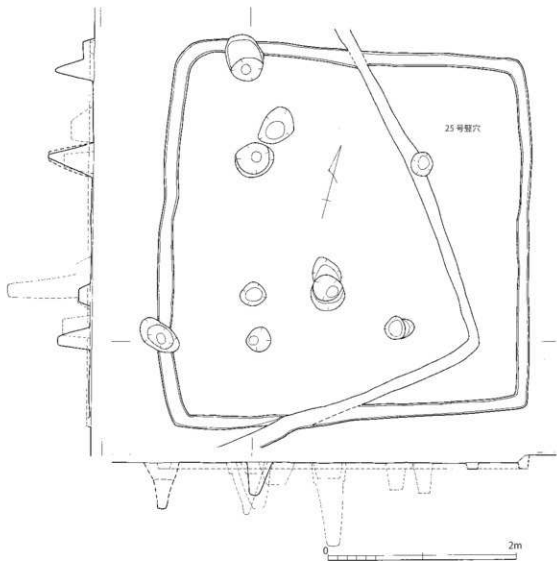
第96図 4次23号堅穴建物出土遺物

16) 25号竪穴建物 (第97図)

調査区中央北側で確認された竪穴建物で、南北4.10m、東西3.90mの長方形を呈し、21号竪穴建物と切り合い関係を有するが、削平により先後関係は確認できなかった。壁は残存しておらず、幅0.15m前後の浅い壁溝が残るのみである。主柱穴は四カ所確認されたが、炉跡や土坑などは確認できなかった。

図示できる出土遺物は2点である。第98図432は黒色を呈する黒曜石製の打製石鏃、433は粘板岩製の磨製石鏃である。

出土遺物からは竪穴建物の時期は決められないが、方形プランであることから、弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる。

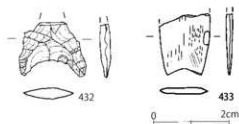


第97図 4次25号竪穴建物

17) 26号竪穴建物 (第99図)

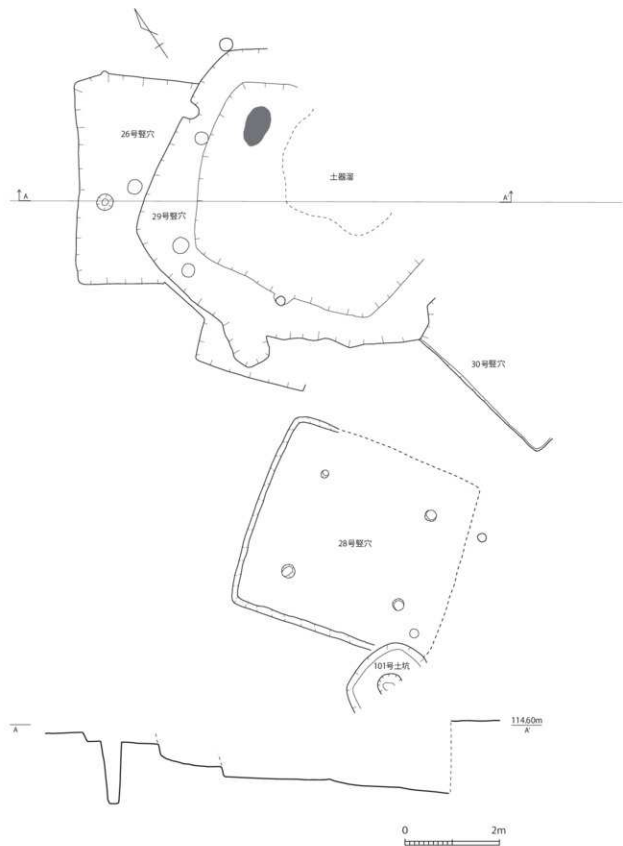
調査区北東部で確認された竪穴建物で、上部の削平のため壁はほとんど残っていない。29号竪穴建物に切られている。略南北は4.40mであるが、東西方向はわからない。床面には2カ所柱穴があるが、主柱穴ではない。

図示できる出土遺物は3点である。第100図434は口縁下に一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、435は平底の甕底部、436はやや大型の高杯の脚部である。



第98図 4次25号竪穴出土遺物

図示した遺物はいずれも弥生時代中期のものであるが、建物は方形プランであり、後期の29号竪穴建物に切られているので、時期は後期以降に下るであろう。

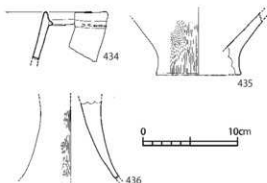


第99図 4次26、29号竪穴建物

18) 27号竪穴建物

調査区の東壁のやや南側で確認された方形の竪穴建物である。16号竪穴建物と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。床面の南寄りには方形の土坑があるが、その他の柱穴、竈などは確認できなかった。

遺物の出土が無く、時期は不明である。



第100図 4次26号竪穴建物出土遺物

19) 28号竪穴建物 (第99図)

調査区中央やや東寄りで確認された竪穴建物で、東西3.20m、南北は不明であるがやや長方形プランを呈するものである。主柱穴は四方所確認された。竈跡などは確認できなかった。

図示できる出土遺物は1点のみで、第101図437は姫島産黒曜石の打製石鏃である。

建物の時期は、出土遺物からはわからないが、きちっとした4本主柱の方形プランであることから弥生時代後期以降であろう。



第101図 4次28号竪穴建物出土遺物

20) 29号竪穴建物 (第99図)

調査区北東部で確認された竪穴建物で、26号竪穴建物を切っている。東側が調査区外のため正確な規模や全形は分からないが、東西は5.7m、南北は6.5mほどに復元できるであろう。プランは胴張りの長方形であろう。床面は中央部分4.9m×4.0mほどが一段低くなっており、そこに焼土や炭化物が堆積し、土器が集中的に出土した。主柱穴と思われる柱穴は確認できなかった。

図示できる出土遺物は23点である。第102図438と447、440から444までは安国寺式土器壺で、口縁上半部の伸びはそれほど顕著ではない。440は二条、442と443は一条の櫛描波状文を施す。439は小川原式土器壺で、口縁部は鋤先状を呈し、外面に円形浮文を付す。445は5条の突帯を廻らせる壺の胴部で、小川原式土器壺の胴部かもしれない。446は口縁部上半がやや立ち上がり気味に開く高坏の坏部、447は頸部に二条の突帯を廻らせる。448は平底の壺底部。449は「く」字形に折れ開く口縁部で、口縁直下に突帯文を廻らせる東北部九州系の甕である。450から第103図454は甕の底部で、いずれも小さな平底からやや上り底状になる。

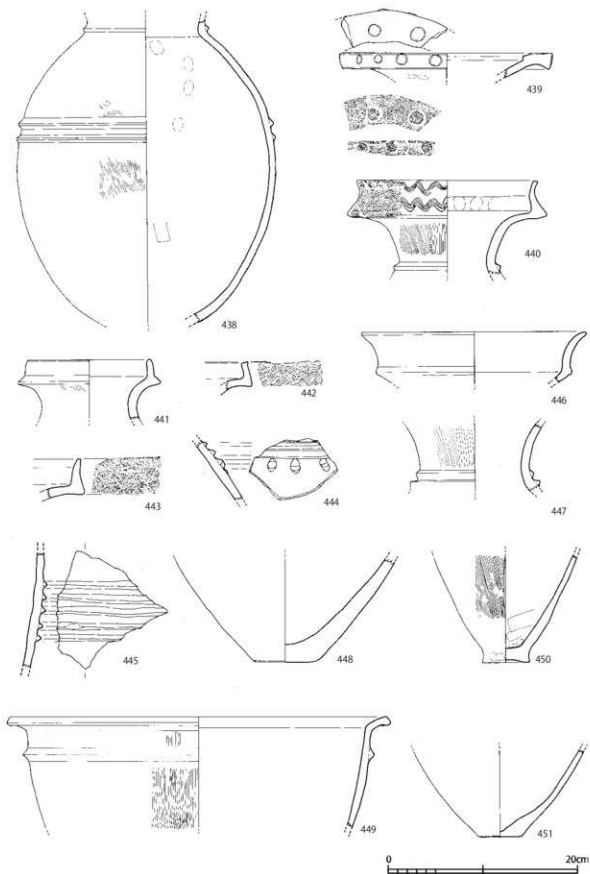
第103図455は鉄器で、断面は楕円形状を呈する。鑿か。456は緑泥片岩製の石剣、457は姫島産黒曜石製の打製石鏃、458は緑泥片岩製の磨製石鏃、459は粘板岩製の磨製石鏃、460は砂岩製の敲石である。

以上より、この竪穴建物の時期はⅥ期(後期前葉)～Ⅶ期(後期中葉)と考えられる。

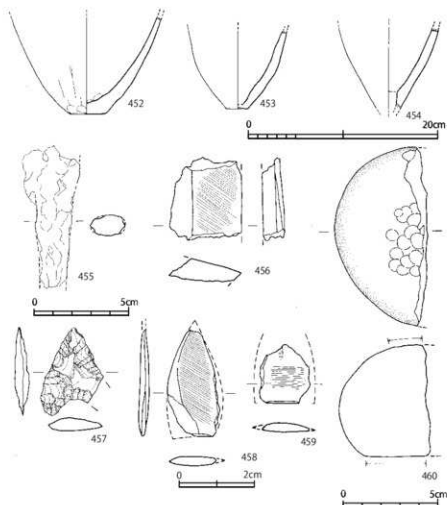
21) 30号竪穴建物 (第99図)

調査区東端の中央壁際で確認された竪穴建物である。大部分は調査区外に展開しており、わずかに方形の一辺、3.2mほどが確認されたに過ぎない。柱穴や竈なども調査範囲内では確認できなかった。

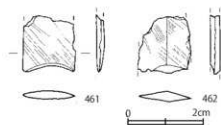
出土遺物は第104図461と462の磨製石鏃で、461は頁岩、462は粘板岩製である。時期を示す土器は出土しなかったため、竪穴建物の時期は不明である。



第102図 4次29竪穴建物出土遺物①



第103図 4次29号竪穴建物出土遺物②



第104図 4次30号竪穴建物出土遺物

土坑

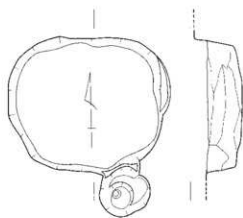
1) 12号土坑 (第105図)

6号竪穴建物に重なる形で検出された土坑で、南北1.40m、東西1.70mのやや長楕円形を呈し、残存する深さ0.35mである。土層断面を見ると、暗褐色土が覆いかぶさるように堆積しており、本来はやや袋状を呈していたのかもしれない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

2) 13号土坑 (第106図)

調査区南東部で検出された土坑で、直径約1.50mの円形を呈す。残存する深さは0.45mである。南西部は後世の擾乱を受けており、壁の上半部が残っていない。断面はやや内傾して立ち上がっており、本来は袋状を呈するものと考え



第105図 4次12号土坑

えられる。埋土は、最上部に炭化物を含む焼土が北から南に向けて流れ込むように堆積しており、その下位には褐色土がほぼ水平堆積していた。

出土遺物がなく、時期は不明である。

3) 15号土坑 (第107図)

10号堅穴建物と6号堅穴建物の間で検出された土坑で、南北2.10m、東西1.80mの隅丸長方形を呈する。上部は10号堅穴建物によって削られており、残存する深さは0.2mである。壁面があまり残っていないので、壁の立ち上がりはわからない。床面、およびやや浮いた状態で大型破片の土器が出土している。

図示できる出土遺物は5点である。

第108図463は胴部に半裁竹管で半円形や縦方向の直線文を施す下城式土器壺、464は口縁部下に一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器壺、465と466は口縁端部を肥厚させ、頸部下に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の壺、467は同じく口縁端部を肥厚させ、胴部はあまり張らない。

以上より、この土坑の時期はⅢ期(中期中頃)と考えられる。

4) 17号土坑 (第109図)

3号堅穴建物に切られた土坑で、直径1.7mの円形を呈する。残存する深さは0.4m程である。壁はほぼ垂直に立ち上がることから、本来は袋状を呈していた可能性が高い。

図示できた資料は2点である。第110図468は口縁端部とその下に二条の刻目突帯を廻らせ、さらに縦方向に刻目突帯を伸ばして胴部の刻目突帯に繋ぐ下城式土器壺である。469は口縁部が「く」字形に折れ開くもので、胴部の張りは少ない。

以上の土器はⅢ期(中期中頃)と考えられる。

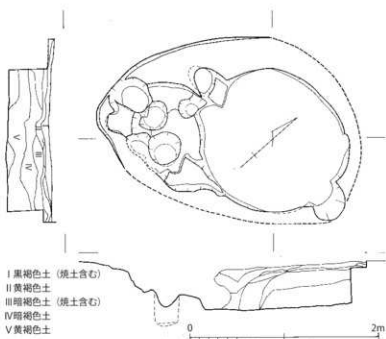
5) 27号土坑 (第111図)

調査区南東角付近で確認された土坑である。上端では南北約1.3m、東西約0.6mの崩れた形の長方形を呈するが、床面(下端)では1.05m×0.3mのしっかりした長方形を呈す。深さは0.77mである。出土遺物がなく、時期の比定はできないが、形状から陥穴の可能性が高い。

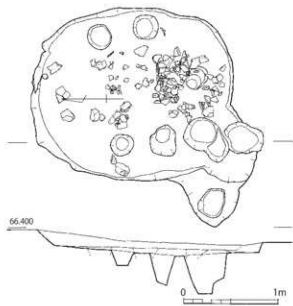
6) 32号土坑 (第88図)

調査区の東端のやや南寄りで見出された土坑で、16号堅穴建物に切られている。上端は直径が約1.05mの不整円形、下端は直径1.17mの不整円形を呈す。残存する深さは0.33mで、断面は袋状を呈している。

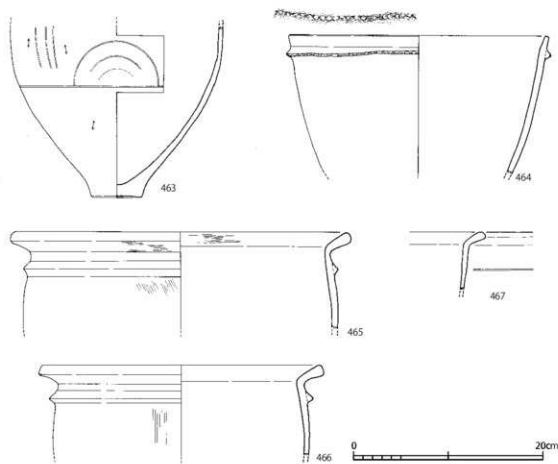
出土遺物はなく、時期比定はできないが、形状から弥生時代前期から中期である。



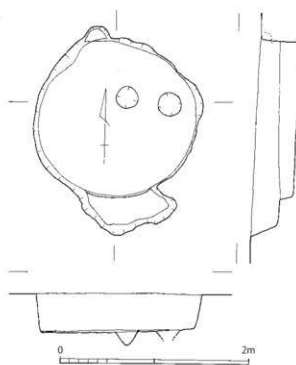
第106図 4次13号土坑



第107図 4次15号土坑



第108図 4次15号土坑出土遺物



第109図 4次17号土坑

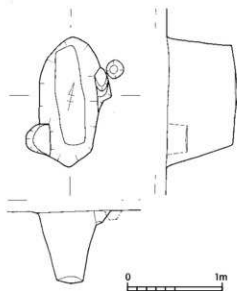


第110図 4次17号土坑出土遺物

7) 33号土坑 (第112図)

調査区の中央やや北西寄りで確認された土坑で、20号、24号堅穴建物に切られている。南北2.2m、東西2.1mの円形で、残存する深さは0.3mである。

土坑の実測図を見ると、土器が比較的多量に出土しているが、整理段階で33号土坑のラベルが付された資料がなかった。しかしながら、この33号土坑を切っている20号堅穴建物出土資料の中の「20号住居 pit」として取り上げている資料(411、412、415、416、418)がこの33号土坑出土資料である可能性が高い。そうすれば、この土坑の時期はⅡ期(中期初頭から前葉)ということになる。



第111図 4次27号土坑

8) 101号土坑 (第113図)

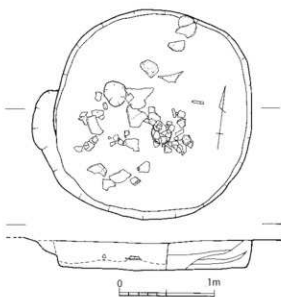
調査区中央やや東寄りにある土坑で、隅丸方形の2基の土坑が切り合っていると考えられる。北側が1.8m × 1.5m、南側が2.2m × 1.6mで、深さは両者とも0.45mである。

出土遺物は1点で、第114図470は平底の壺底部である。

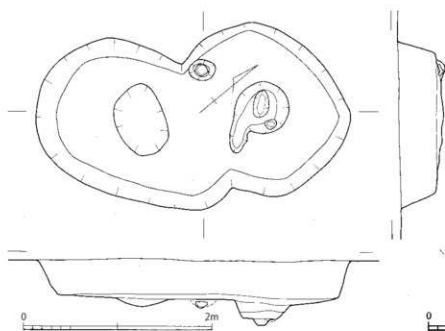
9) 南壁土坑 (第115図)

調査区南端のやや東寄りで確認された土坑である。長軸0.52m、短軸0.35mほどの楕円形で、残存する深さは約0.1mである。

遺物は床面から出土した下城式土器甕(第116図471)である。口縁部下に二条の刻み目突帯が廻る。



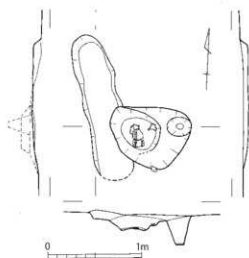
第112図 4次33号土坑



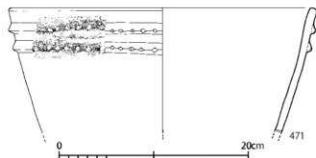
第113図 4次101号土坑



第114図 4次101号土坑出土遺物



第115図 4次南壁土坑

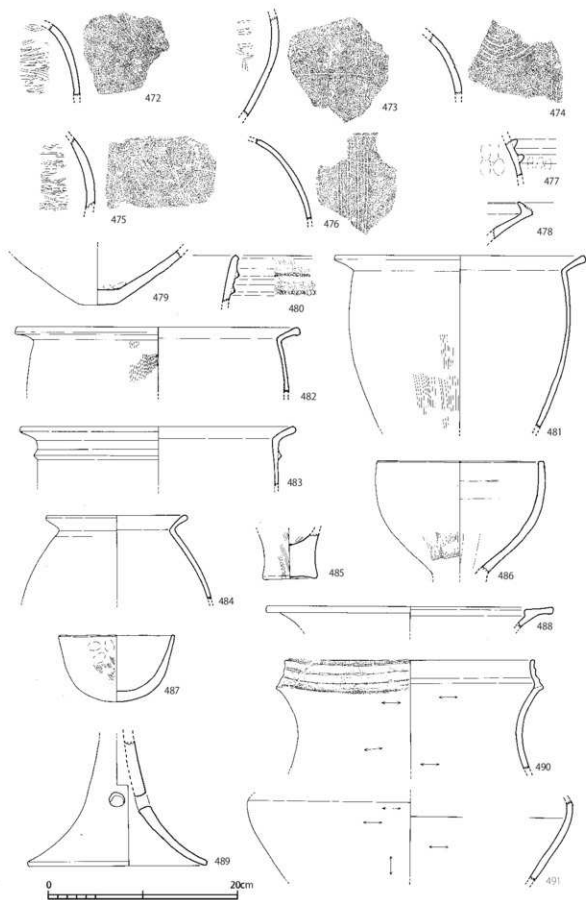


第116図 4次南壁土坑出土遺物

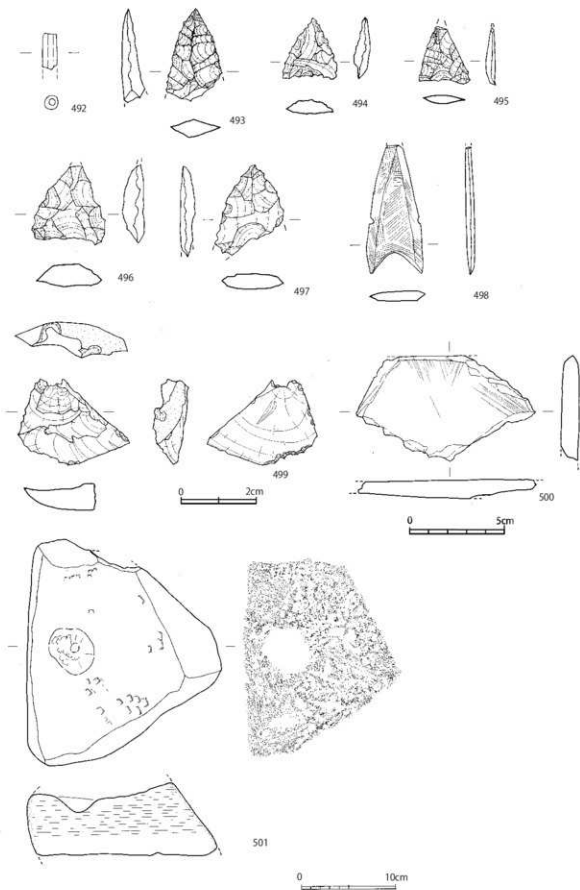
(3) その他の出土遺物

ここでは、表土などから出土した資料を扱う。第117図472から476までは下城式土器壺で、半裁竹管による半円文や直線文が施文される。477はやや突出気味の突帯が廻る壺の胴部、478は複合口縁をなす安国寺式土器壺、479は平底の壺底部である。480から485は甕で、480は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。481から483は口縁端部を肥厚させる東北部九州系の甕で、483は頸部下に突帯を廻らせる。484は「く」字形に折れ開く甕、485は厚手の平底である。486は脚付きの鉢、487は丸底の鉢、488は口縁部が勳先状をなす高坏、489は円形の穿孔がある高坏の脚部である。490と491は晩期縄文土器で、490は口縁部に条痕を持つ深鉢、491は屈曲する胴部である。

第118図492は碧玉製の管玉、493から497は打製石鏃で、493、495、496が能高産黒曜石、494がサヌカイト製である。498は緑泥片岩製の磨製石鏃、499は黒曜石製の剥片、500は片岩製の石包丁、501は泥岩製の石皿である。



第117圖 4次出土一括遺物①



第118圖 4次出土一括遺物②

(4) まとめ

4次調査区は、一連の調査の中では最も北側の調査区ということになる。しかし、台地の端までは約100mあり、集落の端を押さえたと言うことではない。この調査区も上部をかなり削平されており、堅穴建物の壁の残りは良くなく、殆ど壁の残らない堅穴建物もあった。結果的に21基の堅穴建物と9基の土坑を調査した。

堅穴建物は、主軸を北西-南東にとるものが大半で、僅かに南北や北東-南西をとるものがある。いずれも切り合い関係では北西-南東にとるものが新しい。他の調査区でもおおむねそのような傾向があるのが、出土遺物が少ない堅穴建物が多く、遺物からその変遷を追うことは難しい。

第6節 第5次調査

(1) 調査の概要

台地の中央部やや北側、第2次調査区のすぐ北側約347㎡を調査した。検出された遺構は竪穴建物9基、土坑11基である。

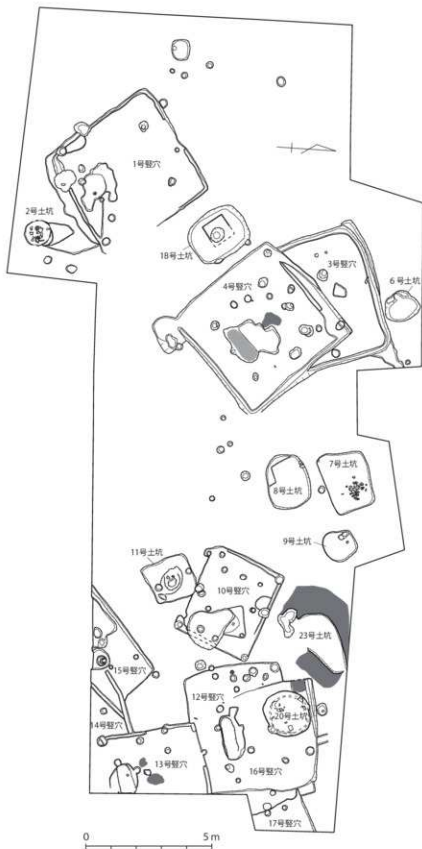
(2) 遺構と遺物

竪穴建物

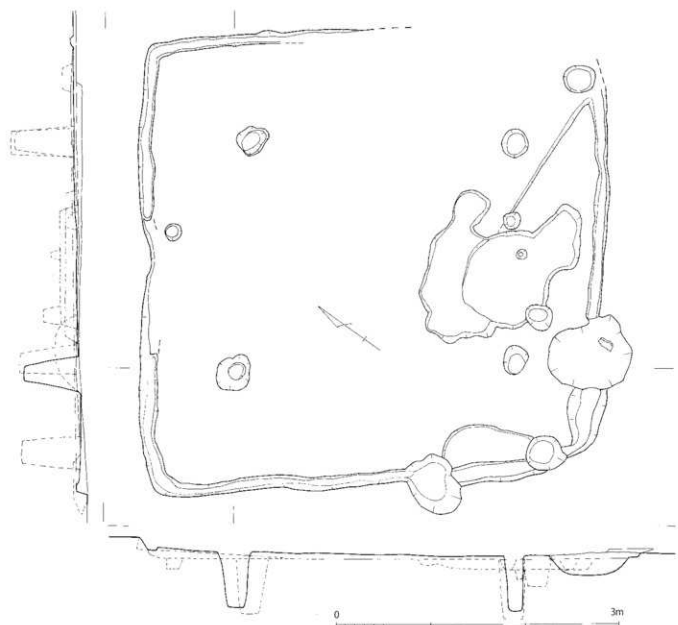
1) 1号竪穴建物(第120図)

調査区の西側で確認された竪穴建物で、一辺4.85mの正方形を呈する。上部は削平されており、床面も中央付近が削り込まれていた。そのため、壁はほとんど残っておらず、幅0.1m前後、深さ数cmの壁溝が残されているのみである。主柱穴は四カ所確認されている。炉は削平を受けて確認できなかったが、炉の南側に通常ある土坑(径1mほど)は確認された。

図示できる出土遺物は9点である。第121図502は口縁上面に粘土を重ねて厚くした壺の口縁部、503から505は安国寺式土器壺で、503は櫛描波状文を、504と505は頸部下に突帯を廻らせる。506は平底の甕底部、507は壺か鉢の脚部である。508は碧玉製の管玉、509はチャート製の打製石鏃、510は安山岩



第119図 5次区遺構配置図



第120図 5次1号竪穴建物

製の石皿である。

この竪穴建物の時期は、安国寺式土器壺からⅦ期（後期中葉）以降と考えられる。

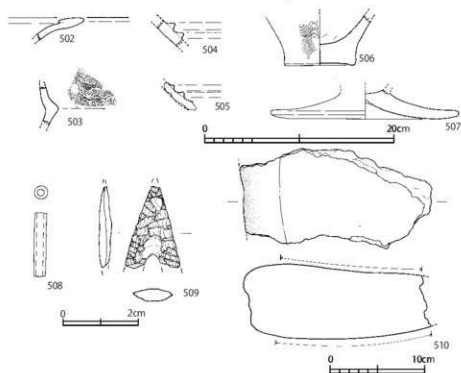
2) 3号竪穴建物（第122図）

調査区の北側で確認された竪穴建物で、4号竪穴建物に切られている。規模は東西方向が5.25mで、南北方向は分からない。残存する深さは約0.2mである。柱穴は主柱穴と考えられるものが2カ所で、4号竪穴建物の中にも3号の主柱穴と考えられるものがないので、あるいは竪穴プランが2本主柱の長方形となるのかもしれない。炉跡と考えられるものも確認できなかった。

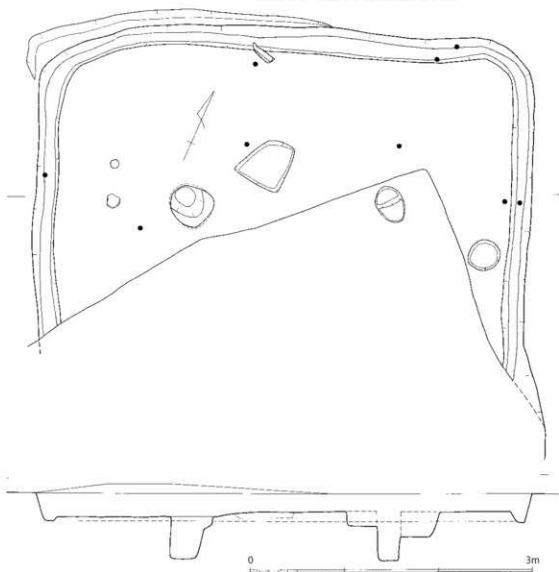
図示できる出土遺物は21点である。第123図511と512は安国寺式土器壺の口縁部。511は上半部があまり伸びないもので、512は大きく伸びた上半部に二条の櫛描波状文を描く。513はやや大型の鉢か。514は小さな平底

の壺底部、515は浅い平底の鉢、516はミニチュア土器の鉢。517と518は土器片加工品。519は鉄鏝、520から523は泥岩製の磨製石鏝、524から530は打製石鏝で、527が泥岩製のほかは姫島産黒曜石製である。531は碧玉製の管玉である。

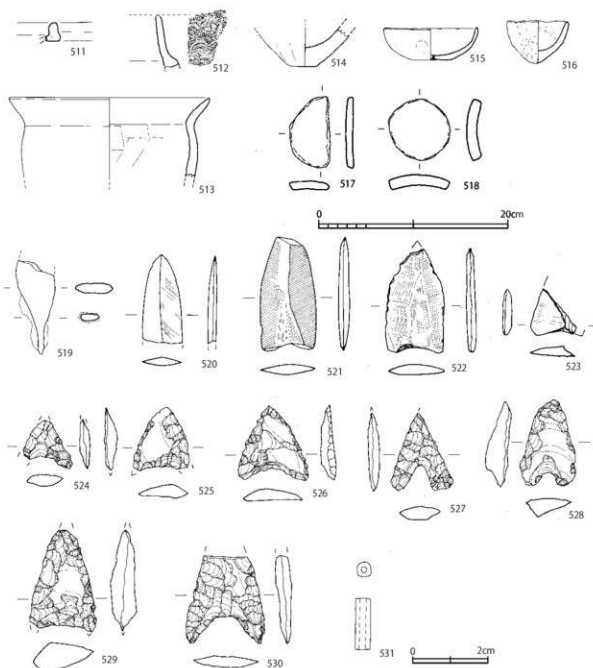
以上から、この竪穴建物の時期はⅨ期（弥生時代終末）と考えられる。



第121図 5次1号竪穴建物出土遺物



第122図 5次3号竪穴建物

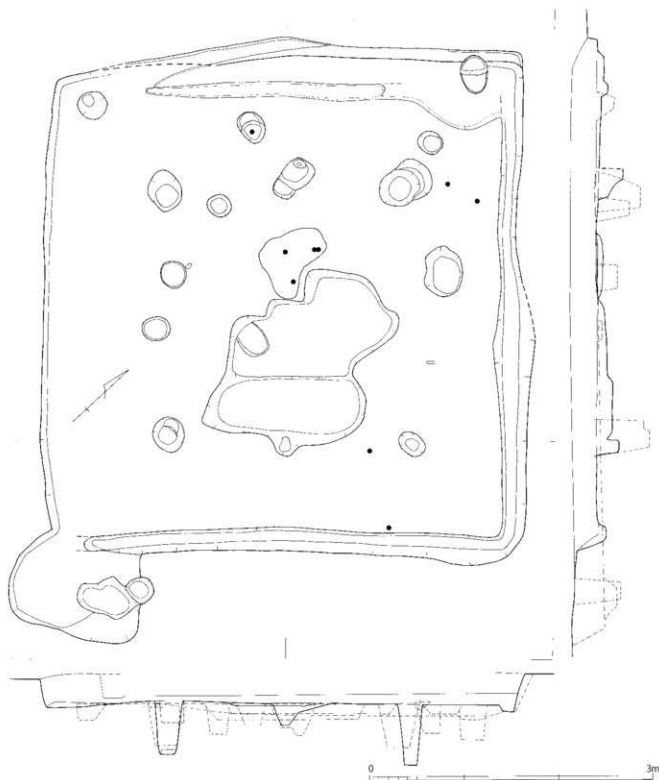


第123図 5次3号竪穴建物出土遺物

3) 4号竪穴建物 (第124図)

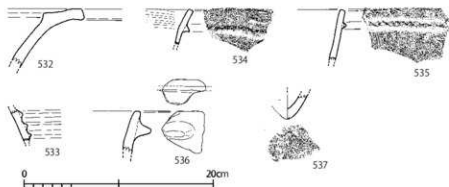
調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、3号竪穴建物を切っている。規模は長軸5.35m、短軸5.15mで、残存する深さは0.3mから0.4mある。主柱穴は四カ所と考えられるが、北西ラインには間にか一カ所柱穴があり、5本主柱となるかもしれない(大野川中・上流域では5本主柱は時々目にするが、大分平野ではあまり見かけない)。床面中央やや北西寄りに0.75m×0.45mほどの範囲に焼土が見られた。地床如であろう。その南東側には1.7m×0.6mの長方形を呈する土坑がある。内部の床には炭化物が一面に広がっていた。

図示できる出土遺物は12点である。第125図532は鋤先状をなす甕の口縁部、533は断面三角形の突帯を胴部上半に三条(+a)廻らせる壺、536は取っ手の付く鉢、537は縄文時代早期の土器で、尖底の深鉢である。538は鉄製刀子、539は泥岩製の砥石、540は泥岩製の磨製石斧、541は姫島産黒曜石製の打製石鏃、542は泥岩製の磨製石鏃である。543は直径5mmのガラス小玉である。



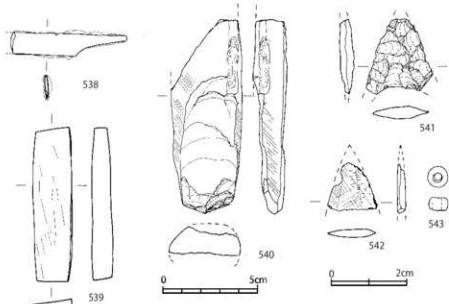
第124図 5次4号竪穴建物

図示できた土器は弥生時代中期のものであるが、Ⅸ期（弥生時代終末）である3号竪穴建物で切っており、4号竪穴建物の時期はⅨ期（弥生時代終末）以降となる。



4) 10号竪穴建物（第126図）

調査区中央やや東寄りでは確認された竪穴建物である。11号土坑に切られている。南北3.05m、東西3.75mの長方形を呈し、残りの良いところで残存する深さは0.15m程度である。床面の東側3分の1近くは攪乱で掘削を受けており、そのためその部分は柱穴も確認できていない。主柱穴は7か所になることが想定されるが、確認はできない。また、北側と西側の壁際には壁溝がある。炉跡と考えられる遺構は確認できなかった。

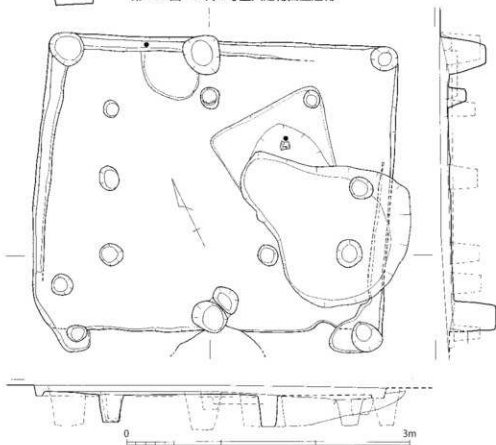


第125図 5次4号竪穴建物出土遺物

この10号竪穴建物の四つのコーナー部分と二長辺の中央にそれぞれ柱穴があり、変則的な主柱穴かとも考えられたが、必ずしも10号竪穴にきっかりと納まっているわけではないため、別遺構と考えた。

図示できる出土遺物は3点である。第127図544は鼓状になる器台、545は泥岩製の磨製石鏃、546は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

544のような器台は中期後半から後期までであるので、時期の決め手にはならないが、竪穴プランが方形であることから、竪穴建物の時期は弥生時



第126図 5次10号竪穴建物

代後期以降である。

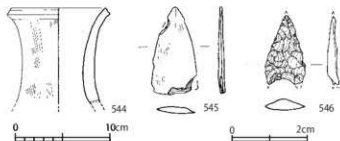
5) 12号堅穴建物(第128図)

調査区の東端で確認された堅穴建物である。13号と16号堅穴建物に切られている。規模は南北3.9m、東西5.1mに復元でき、残存する深さは0.18mほどである。主柱穴は四カ所と考えられるが、北西部分は20号土坑と重なっていたために、検出できなかったと思

われる。南側の二つの主柱穴の間には1.75m×0.83mの長楕円形を呈する土坑がある。土坑の床の南側には炭化物が堆積していた。この土坑は、通常炉跡の南側にある土坑であるが、炉跡は確認できなかった。

図示できる出土遺物は9点である。第129図547は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、548は縄やかに外反して開く甕、549と550は平底の甕底部、551は小さな脚台が付く鉢である。552は金山産サマカイト製の打製石鏃、553と554は安山岩製の磨石、敲石、555は花崗岩質岩製の敲石である。553は被熱を受けている。

この堅穴建物の時期は、548の甕などから後期と考えられる。



第127図 5次10号堅穴建物出土遺物

6) 13号堅穴建物(第130図)

調査区の南東角部にある堅穴建物で、2分の1ほどは調査区外になり、規模、全形は不明である。12号と14号堅穴建物に切っている。一部には幅0.1m前後の壁溝が廻る。主柱穴は四カ所と考えられるが、東側の2本は調査区外となっており、確認できない。床面のほぼ中央と思われる位置に0.65m×0.45mほどの楕円形に床が焼けた部分が認められた。地床炉と考えられる。その南側には、一部調査区外に伸びるが、直径1.1mあまりの土坑が確認された。炉の南側に通有な土坑である。

図示できる出土遺物は6点である。第131図556と557は安国寺式土器甕で、556は胴部突帯の下に勾玉状の浮文を2個1セットで付している。558は「く」字形に折れ開く甕の口縁部である。559は鉄鏃、560は緑泥片岩製の磨製石鏃、561はチャート製の打製石鏃である。

この堅穴建物の時期は、後期後半(Ⅶ期以降)と考えられる。

7) 14号堅穴建物(第134図)

調査区の南東角部にある堅穴建物で、大部分は調査区外である。13号堅穴建物に切られ、15号堅穴建物に切っている。残存する深さは0.1mほどである。北側の一辺に幅0.15mほどの壁溝がある。ピットは一つあるが、この堅穴に伴うものかはわからない。炉跡や土坑も調査範囲では確認できなかった

図示できる出土遺物は3点である。第132図562は平底の甕底部、563は器台の裾部、564は縄文時代早期の押型土器である。

図示した遺物は縄文土器と弥生時代中期の土器であるが、第15号堅穴建物に切っていることから、この建物の時期はⅦ期(後期中葉)以降になる。

8) 15号堅穴建物(第134図)

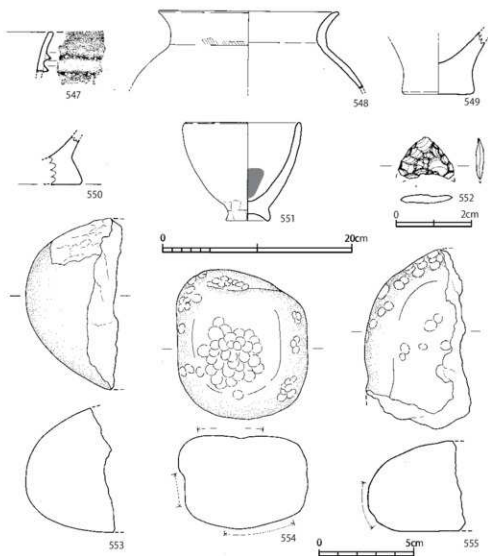
14号堅穴建物に切られており、大部分は調査区外に延びるため規模は不明であるが、方形基調の堅穴建物である。西側の壁際には幅0.1m程度で深さ0.05mほどの壁溝が伸びる。床面には約0.2mの深さの土坑が確認されたが、この建物に伴うものかどうかは確定できなかった。それ以外にもピットが確認されているが、主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は3点である。第133図564は柳播波状文を施す安国寺式土器甕の口縁部、566は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、567は頸部下に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の甕である。

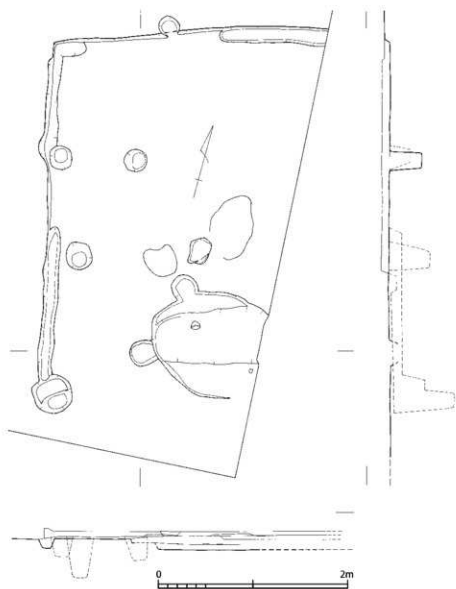
建物の時期を決めるには資料が少ないが、565からⅦ期(後期中葉)以降であることは言える。



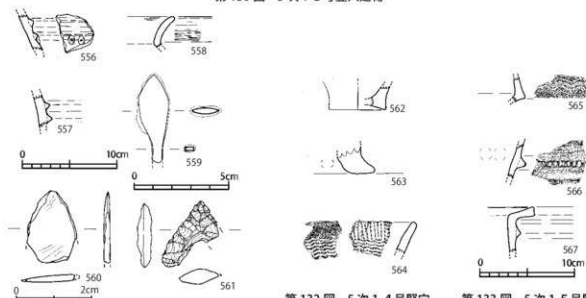
第128図 5次12、16、17号竪穴建物



第129図 5次12号竪穴建物出土遺物



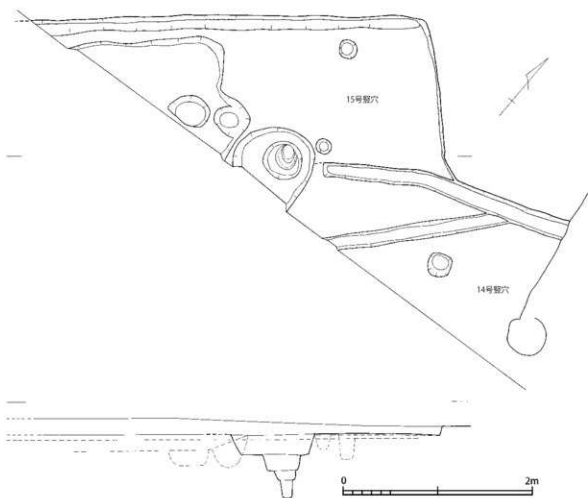
第130図 5次13号竪穴建物



第131図 5次13号竪穴建物出土遺物

第132図 5次14号竪穴建物出土遺物

第133図 5次15号竪穴建物出土遺物

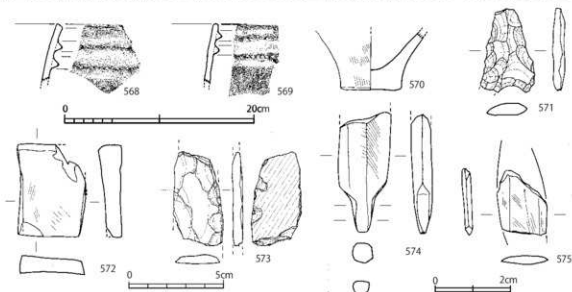


第134図 5次14、15号堅穴建物

9) 16号堅穴建物(第128図)

調査区の北東で確認された堅穴建物で、12号と17号堅穴建物、さらに20号土坑を切っている。12号堅穴建物とは床面の高さがほぼ同一であるが、16号堅穴建物に確実に伴う遺構は床面で確認できなかった。また、北西角部には焼土が堆積していた。

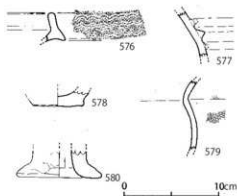
図示できる出土遺物は8点である。第135図568と569は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。570



第135図 5次16号堅穴建物出土遺物

は平底の甕底部。571はサマカイト製の打製石鏃、572は泥岩製の砥石、573は緑泥片岩製の磨製石鏃未成品、574は茎のある泥岩製の磨製石鏃、575は結晶片岩製の磨製石鏃である。

図示した出土土器は中期に属するものであるが、堅穴プランが方形であることから後期のものである可能性が高い。



第136図 5次17号堅穴建物出土土物

10) 17号堅穴建物 (第128図)

調査区の北東拉張部で確認された堅穴建物で、16号堅穴建物に切られている。大部分は調査区外なので、規模や形状は不明である。残存する深さは約0.15mである。床面の西側は0.04mほど低くなっている。ピットは複数確認されたが、支柱穴は不明である。

図示できる出土土物は5点である。第136図576と577は安国寺式土器甕である。576は三条の櫛播波状文が描かれる。577は胴部上半に三条の突帯を廻らせる。578は平底の甕底部、579は球形胴の鉢、580は裾部が強く折れる器台である。

以上から、この堅穴建物の時期はⅤ期(後期中葉)と考えられる。

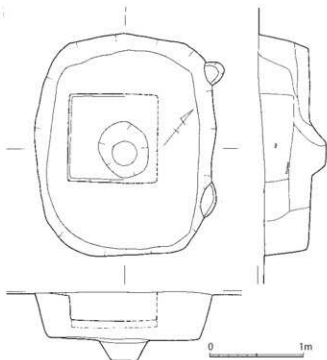
土坑

1) 1B号土坑 (第137図)

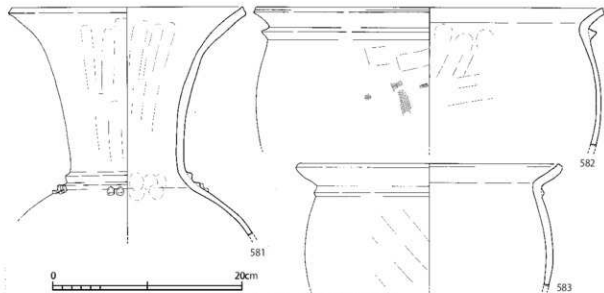
調査区南西部の拉張区で確認された土坑である。上端、下端とも南北1.05m、東西0.95mほどで、残存する深さは0.36mである。壁の立ち上がりはほぼ垂直か、やや内傾しており、本来は袋状をなすものと考えられる。床面直上からは押しつぶされたように、大きな破片が出土している。

図示できる出土土物は破片の3点である。第138図581は長頸甕で、屈曲部に二条の断面三角形の突帯が廻り、その下位に勾玉状浮文が2個1セットで付される。582と583は頸部に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の甕である。

582と583は胴部が張る新しい要素があり、581は中期末に使われるようになる勾玉状浮文があるので、この土坑の時期はⅤ期(中期末)と考えられる。



第137図 5次1B号土坑



第138図 5次1B号土坑出土土物

2) 2号土坑 (第139図)

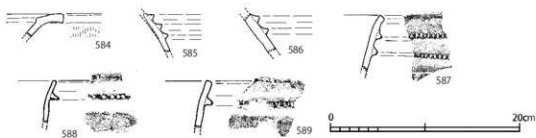
1号堅穴建物と4号堅穴建物との間で確認された大型の土坑である。南北2.34m、東西1.85m、深さ0.54mで、隅丸長方形を呈する。中央には0.94m四方の後世の掘り込みがあるが、床面には0.58m×0.50m、深さ0.18mの楕円形を呈するピットがある。土層を見ると、この土坑に伴うものであることがわかる。堆積状況は、自然堆積ではなく、北側から理め戻したような状況である。

図示できる出土遺物は6点である。第140図584は鋤先状口縁の壺、585と586は胴部上半に突帯を廻らせる壺、587から589は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。

この土坑の時期は、584からⅣ期(中期後葉~末)と考えられる。下城式土器甕の形態も矛盾しない。



第139図 5次2号土坑



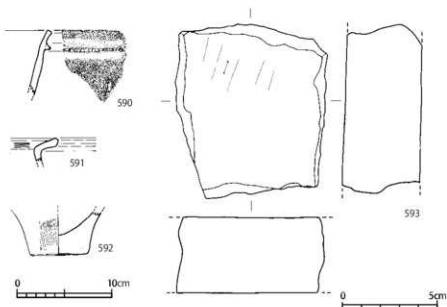
第140図 5次2号土坑出土遺物

3) 5号土坑 (第141図)

4号堅穴建物の南コーナー部分で確認された土坑で、4号堅穴建物との先後関係は確認できていない。規模は東西で1.40m、南北は1.0mほどの楕円形に復元出来る。深さは約0.3mである。

図示できる出土遺物は4点である。第141図590は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、591は口縁端部を小さく狭み上げる東北部九州系の甕、592は平底の甕底部である。593は安山岩製の砥石である。

この土坑の時期は、Ⅲ期(中期中頃)からⅣ期(中



第141図 5次5号土坑出土遺物

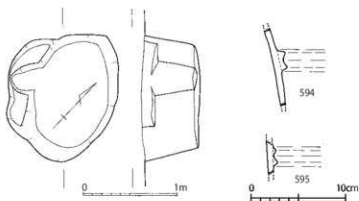
期後葉～末)と考えられる。

4) 6号土坑 (第142図)

3号堅穴建物の北側で確認された土坑である。南北1.40m、東西1.15m、深さ0.65mで、楕円形を呈する。

図示できる出土遺物は2点である。第143図594は幅広の突帯を廻らせる壺胴部、595は二条の突帯を廻らせる壺胴部である。

この土坑の時期を決めるのは難しいが、595が後期のものであれば後期前半か。



第142図 5次6号土坑

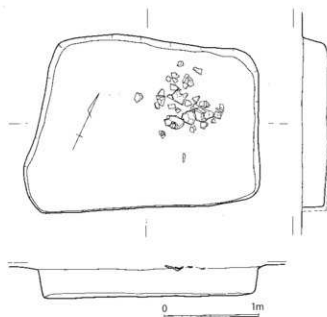
第143図 5次6号土坑出土遺物

5) 7号土坑 (第144図)

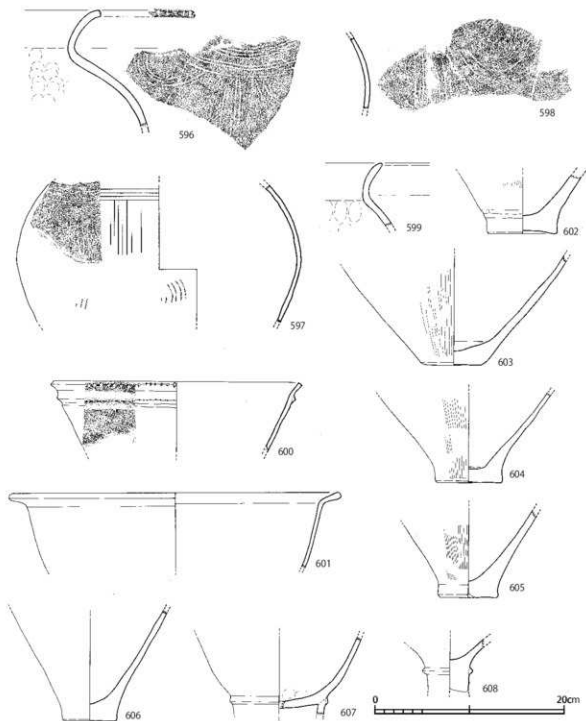
調査区中央北側で確認された土坑である。南北1.80m、東西2.35m、深さ0.35mで、隅丸の長方形を呈する。下層からはドンダリの種子が出土している。一方、土器は主に上層で出土している。

図示できる土器は13点である。第145図596から598は下城式土器壺で、半截竹管による直線文や重弧文が描かれる。596は口唇部に刺突文を施す。599は緩やかに外反する口縁部を持つ壺、600は外傾して開く口縁部の下城式土器甕で、刻目突帯文を廻らせる。刻みは口唇部にも施される。601は口縁部を肥厚させる東北部九州系の甕、602から606は平底の甕底部である。いずれも底部の厚さは極端に厚くない。607は円盤充填技法で作られた台付鉢で、脚台部に縦長方形の透孔を有するタイプであろう。608は一条の突帯を廻らせる脚部である。

以上より、この土坑の時期はⅡ期(中期初頭～前葉)と考えられる。



第144図 5次7号土坑



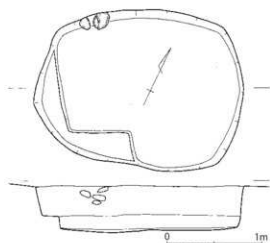
第145図 5次7号土坑出土遺物

6) 8号土坑 (第146図)

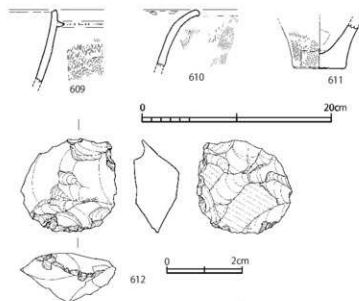
7号土坑のすぐ南で確認された土坑である。南北1.70m、東西2.20m、深さ0.45mで、隅丸の長方形を呈する。床面は南西部から西側にかけて掘り残しており、L字状に約0.15m高くなっている。

図示できる出土遺物は4点である。第147図609は口縁部が内湾しながら開く下城式土器甕で、一条の刻目突帯文を廻らせる。610は大きく開く壺の口縁部、611は平底の甕底部である。612はチャート製のスクレーパーである。

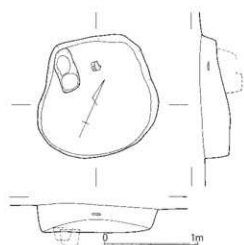
この土坑の時期は遺物が少なく決めがたいが、609の形状などからⅡ期(中期初頭～前葉)の可能性が高い。



第146図 5次8号土坑



第147図 5次8号土坑出土遺物



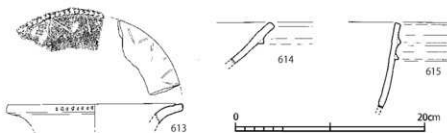
第148図 5次9号土坑

7) 9号土坑 (第148図)

7号土坑のすぐ東側にある土坑である。規模は南北1.30m、東西1.27mの略円形で、深さは0.30mである。床面の北西部にはピットが二つ連なって確認されている。

図示できる出土遺物は3点である。第149図613は口唇部に刺突文を廻らせ、口縁内面には連続「ハ」字文を押捺する甕、614は口縁部下に突帯文を廻らせ、大きく開く鉢、615は口縁下に二条の突帯を廻らせる甕。以上はいずれも下城式土器の範疇で捉えられる土器群である。

以上より、この土坑の時期はⅡ期(中期初頭~前葉)と考えられる。



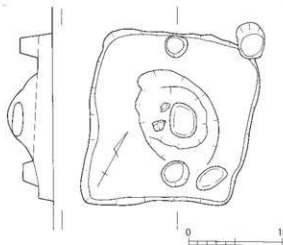
第149図 5次9号土坑出土遺物

8) 11号土坑 (第150図)

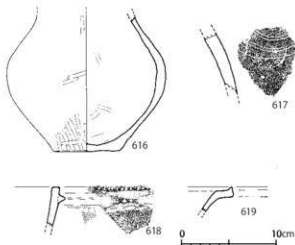
10号竪穴建物の南側に接して確認された、一辺1.77mの方形を呈する土坑である。深さは壁際で0.17m前後であるが、中央付近が皿状に深くなっており、中央部では0.45mである。

図示できる出土遺物は4点である。第151図616は緩やかなふくらみを持つ小型の壺、617は半截竹管で直線文を描く下城式土器壺、618は刻目突帯を廻らせる下城式土器壺、619は口縁端部を小さく積み上げる鉢である。

以上より、この土坑の時期はⅡ期(中期中頭～前葉)と考えられる。



第150図 5次11号土坑



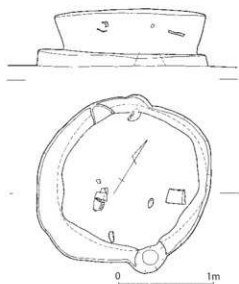
第151図 5次11号土坑出土遺物

9) 20号土坑 (第152図)

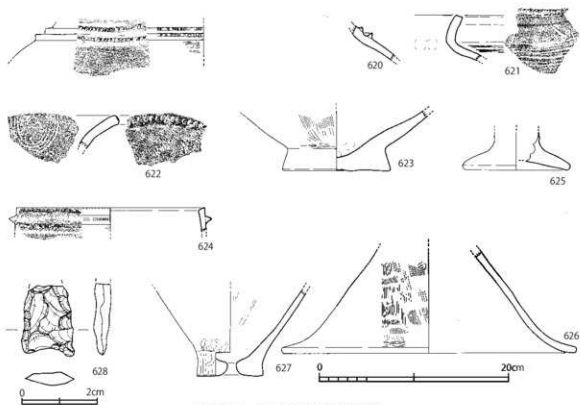
調査区北東部に確認された土坑である。16号竪穴建物に切られている。二段掘りとなっており、一段目は1.73m×1.83mのやや楕円形で、深さ0.18mである。そこから更に直径1.45mのはほぼ円形の掘方があり、深さは0.45mである。床面は直径1.55mとなり、断面は袋状を呈する。遺物は埋土中位から出土している。

図示できる出土遺物は9点である。第153図620は頸部下に二条の細かな刻目突帯を廻らせる壺、621は小さく折れ開く壺の口縁部で、肩部に沈線文を施す。口唇部には刻目がある。622は口唇部に刻目を入れ、口縁内面には半截竹管による半月状の文様を描く。623は円盤状の平底の壺底部。624は口縁部が内傾する下城式土器壺で、口縁直下に一条の刻目突帯を廻らせる。625は支脚か。626は蓋、627は瓶である。628は姫島産黒曜石製の打製石剣である。

以上から、この土坑の時期はⅡ期(中期中～前葉)と考えられる。



第152図 5次20号土坑



第153図 5次20号土坑出土遺物

10) 23号土坑 (第154図)

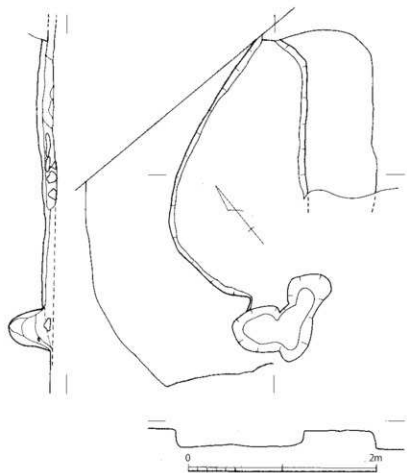
調査区の北東壁際で確認された土坑である。長軸方向は2.65m、短軸方向は最大1.50mの不定形を呈する。深さは深いところで0.18mである。床面には焼土が堆積し、周辺にも焼土が広がっていた。

出土遺物がなく時期の比定はできない。

11) 24号土坑

調査区北東にある16号竪穴建物のすぐ北側で確認された土坑で、南北0.40m、東西0.50mのやや楕円形を呈し、深さは0.40mである。甎(629)が底面に据えられたような状態で出土している。

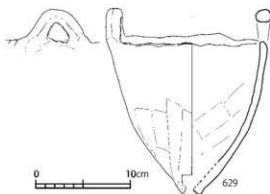
土坑内からは第155図629のみが出土した。629は縦方向に2か所の取っ手の付く甎である。底部には焼成前にあけた孔がある。



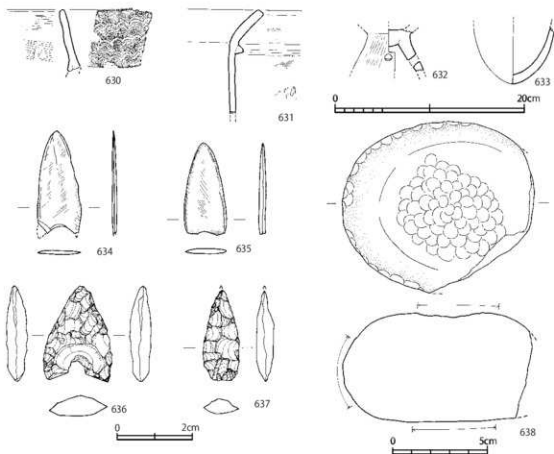
第154図 5次23号土坑

(3) その他の出土遺物

ここでは、表土などから出土した遺物を説明する。第156図630は口縁部上半がよく伸びた安国寺式土器壺の口縁部、631はやや突出気味の突帯を廻らせ、緩やかに「く」字形に折れ開く寛、632は円孔のあいた高坏脚部、633は鉢形のミニチュア土器である。634と635は緑泥片岩製の磨製石鏃、636は珪化した泥岩製の打製石鏃、637は姫島産黒曜石製の打製石鏃、638は安山岩製の凹石である。



第155図 5次24号土坑出土遺物



第156図 5次一括遺物

(4) まとめ

堅穴建物9基と土坑11基を調査した。5次調査区は台地の北端に近い場所にあたる。遺構を見ると、弥生時代中期の小型方形および円形の土坑、後期の大型の方形堅穴建物と中型の方形建物という組み合わせになる。

第7節 第6次調査

(1) 調査の概要

台地のほぼ中央部やや東側約386㎡を調査した。検出された遺構は竪穴建物17基、掘立柱建物1棟、土坑3基である。8号竪穴建物の埋土から、後漢鏡片が出土している。大分県内では竪穴建物の埋土から鏡片が出土した初めての事例となった。

(2) 遺構と遺物

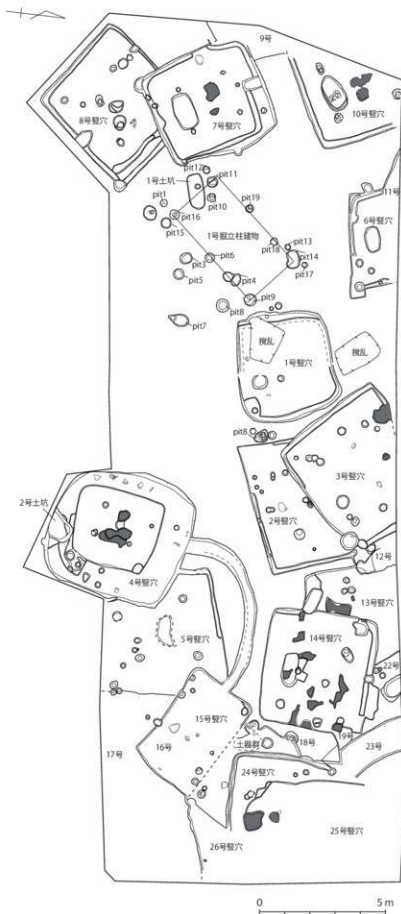
竪穴建物

1) 1号竪穴建物(第158図)

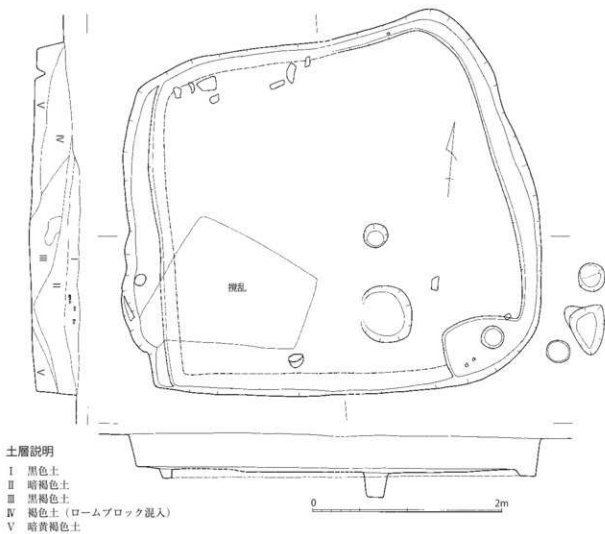
調査区の中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、南北3.75m、東西3.30m～4.30mのやや台形を呈する。残存する深さは0.5mである。東側の一辺には壁溝があり、北側と南側にも回り込んでいる。東側は調査時に掘削が大きすぎたために壁溝を失った可能性が高い。床面には大小のピットがあるが、主柱穴は不明である。また、炉跡も確認できなかった。埋土は北側からの流れ込みが強いが、自然堆積である。

図示できる出土遺物は10点である。第159図639は胴部最大径が胴部上位にあり、底部がやや凸レンズ状に突出する安国寺式土器壺である。胴部には三条の突帯が巡り、勾玉状浮文が2個1セットで付される。640から642は下城式土器甕で、一条の刻目突帯を巡らす。643は胴部に一条の突帯を巡らせる東北部九州系の甕、644は口縁部が直立気味に開く小型の壺、645はミニチュア土器の甕か、646はやや突出気味の平底の鉢、647は緑泥片岩製の磨製石鏝、648は安山岩製の蔽石である。

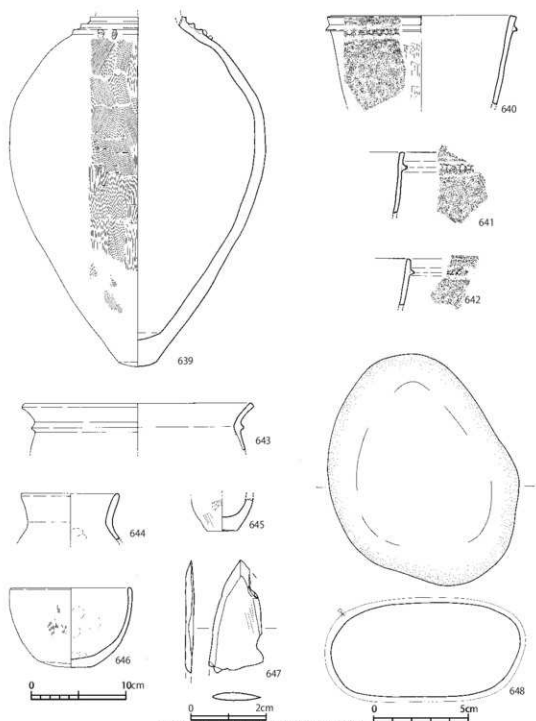
以上から、この竪穴建物の時期はVI期(後期前葉)と考えられる。



第157図 6次調査区遺構配置図



第158図 6次1号竪穴建物

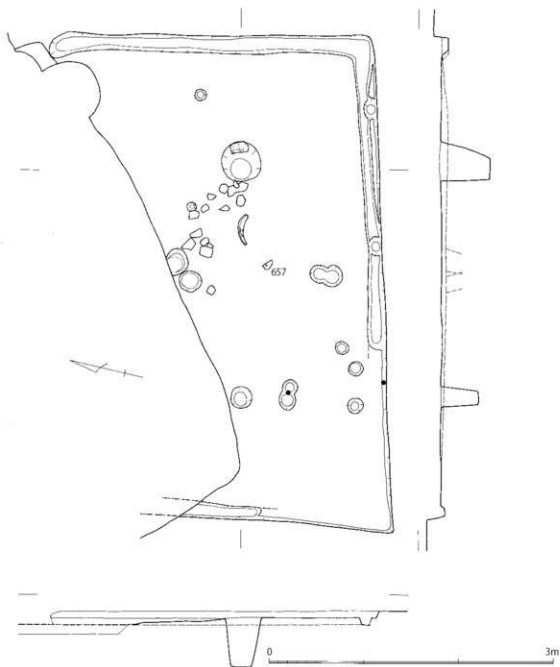


第159図 6次1号竪穴建物出土遺物

2) 2号竪穴建物 (第160図)

調査区中央北壁付近で確認された竪穴建物で、北側半分ほどを3号竪穴建物に切られている。東西方向は5.16mあるが南北は不明である。残存する深さは0.05mほどである。支柱穴は四カ所である。東側と南側の一部、西側の一部には幅0.12m～2.0m、深さ0.05mほどの壁溝が残る。床面には炉跡を示す焼土や炭化物は確認できなかった。

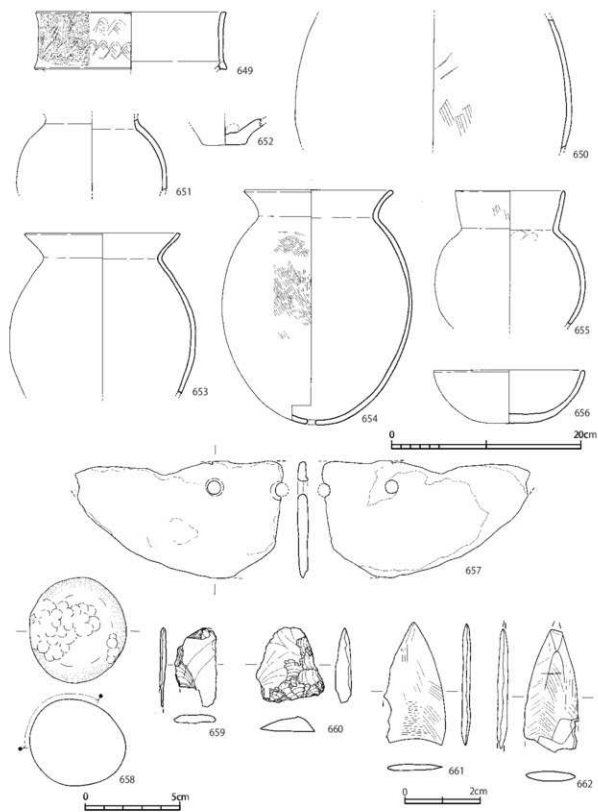
図示できる出土遺物は15点である。第161図649は二条の櫛描波状文が描かれた口縁部上半がほぼ直立する安国寺式土器壺、650はやや下膨れ状の体部を持つ壺、651は球形の体部を持つ小型の壺、652は平底をなす壺底部、653と654は器壁の薄い甕で、653は口縁端部内側がわずかに摘み上げられ、内面はヘラ削りの痕跡がわずかに確認できる。654は胴部最大径を中位に持つ縦長で丸底で、底部に穿孔がある。655は口縁部が直線的に開く壺、656はほぼ丸底の浅い鉢である。657は片岩製の石包丁、658は安山岩製の敲石、659は結晶片岩製の磨製石鎌未成品、



第160図 6次2号竪穴建物

660はサヌカイト製の打製石鏃、661と662は磨製石鏃で、661は凝灰岩製、662は緑泥片岩製である。第162図663はホルンフェルス製の石核である。

この竪穴建物の時期はX期（古墳時代前期）である。



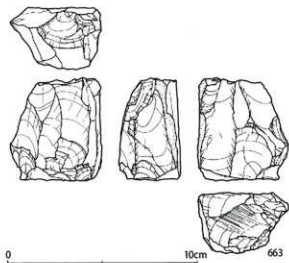
第161圖 6次2号竪穴建物出土遺物①

3) 3号竪穴建物(第163図)

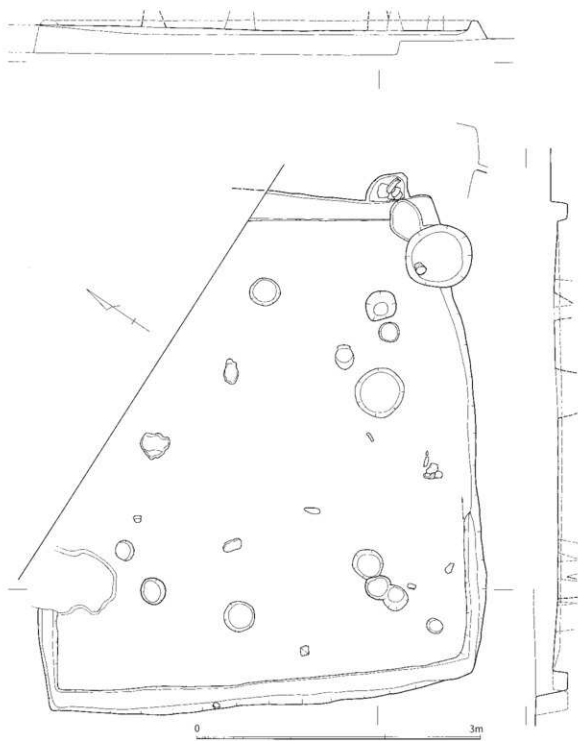
調査区中央北壁付近で確認された竪穴建物で、2号竪穴建物を切っており、北側の角部は調査区外に延びている。規模は南北4.65m、東西5.32mの長方形で、残存する深さは中央部で0.28mある。北西角付近から南西角付近まで、幅約0.2m、深さ0.15mほどの壁溝が廻る。支柱穴は四カ所と考えられるが、一カ所は調査区外になる。床面には焼土が四カ所で確認されたが、中央付近にはなく、炉跡は不明と言わざるをえない。この建物に伴うと思われる土坑も確認できなかった。

図示できる出土遺物は9点である。第164図664は直立気味に立ち上がる下城式土器甕で、一条の刻目突帯が廻る。口唇部にも刻みが施される。665も一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、666は「く」字状に折れて開く甕、667は口縁端部をやや摘み上げる東北部九州系の甕、668は平底の甕底部、669は底部の器壁に小さな穴が貫通する鉢、670は口縁部が大きく伸び開く小型丸底甕である。外面はよく磨かれている。671は安山岩製の台石、672は姫島産黒曜石の石核である。

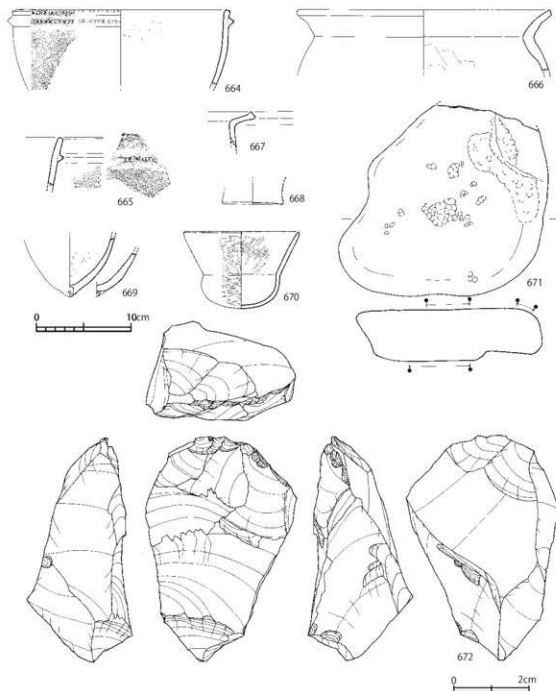
以上から、この竪穴建物の時期はX期(古墳前期)である。



第162図6次2号竪穴建物出土遺物②



第163図 6次3号竪穴建物

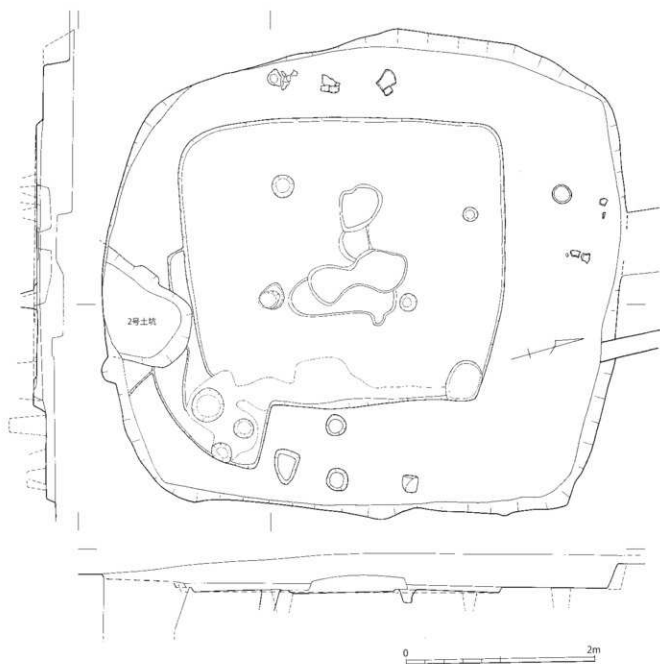


第164図 6次3号竪穴建物出土遺物

4) 4号竪穴建物 (第165図)

調査区中央南側で確認された竪穴建物で、5号竪穴建物を切っている。竪穴は二段掘りになっており、一段目は南北5.45m、東西5.0mの隅丸方形を呈し、深さは約0.3mである。二段目は、一段目のやや南西寄りに、南北3.40m～2.94m、東西3.10mの台形を呈するプランで、深さは一段目の床から0.07m～0.1mになる。二段目の床には東側壁際に壁溝があり、中央には切り合いながら焼土と炭化物が広がる。柱穴は複数見つかっているが、主柱穴と考えられるものは見つからなかった。また、一段目の南側床面では土坑が確認された(4号住居跡内土坑)が、この建物に伴うものではない。

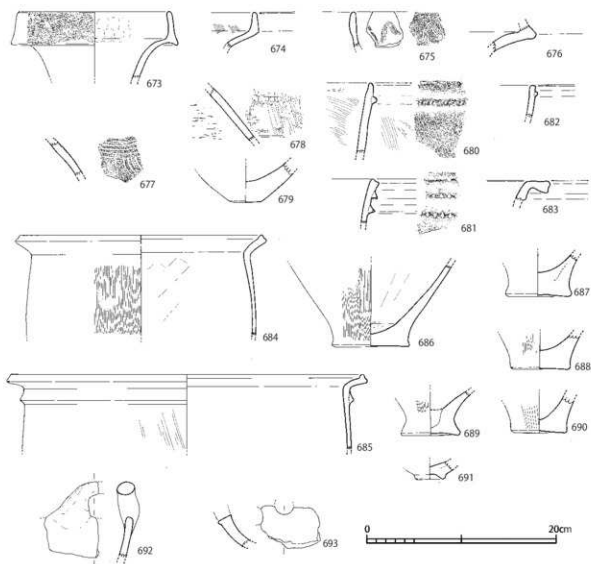
図示できる出土遺物は27点である。第166図673から676は安国寺式土器壺の口縁部で、あまり伸びない口縁部上半部には一条の櫛波状文が描かれる(673、675)。677と678は下城式土器壺の体部で、半截竹管による直



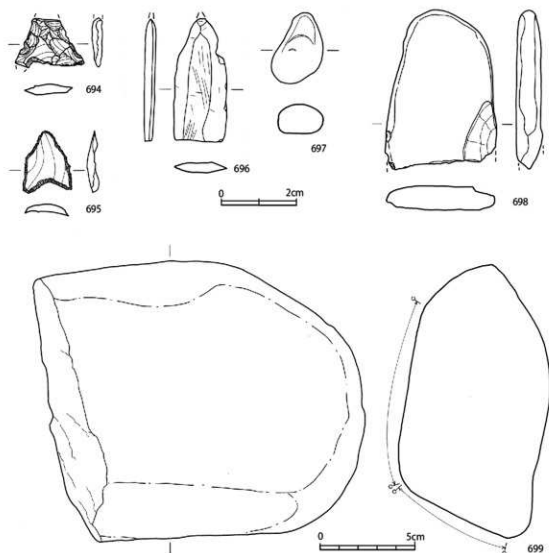
第165図 6次4号竪穴建物

線や曲線が描かれている。679は平底を呈す壺の底部。680と681は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕である。682も摩耗により刻目が確認できないが、下城式土器甕である。683、684、685は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、686から690は平底の甕底部、691は高台風の底部。鉢か。692は口縁部に2か所取っ手を付ける甕、693は大型の円孔を持つ高坏の脚部である。第167図694はサスカイト製の打製石鏃、695は姫島産黒曜石製の打製石鏃、696は粘板岩製の磨製石鏃、697は蛇紋岩の小鏃を磨いたもの（用途不明）、698は緑泥片岩製の打製石斧、699は珩岩製の磨石である。なお、684、685、687、688、690の5点については、後述する「4号住居跡内土坑」出土資料であり、本来この建物に伴うものではない。

この竪穴建物の時期は安国寺式土器壺からⅥ期（後期前葉）と考えられるが、建物は中期の形態を持つ。あるいは、後期の土器は何らかの要因で混ざり込んだものであろうか。



第166图 6次4号竖穴建物出土物①



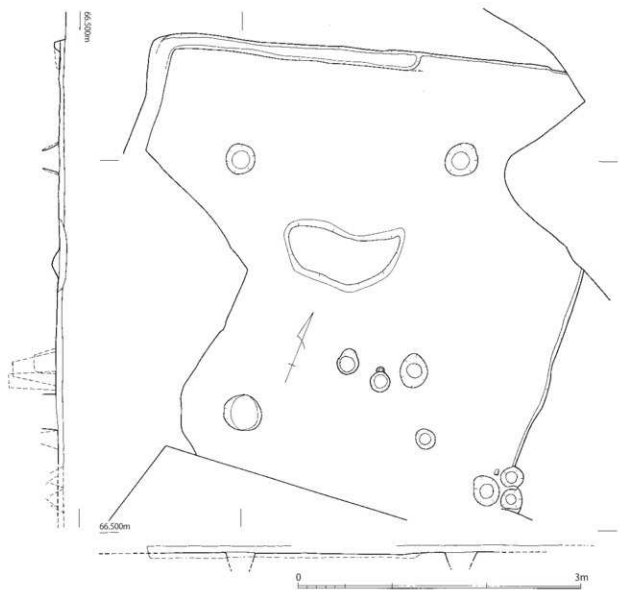
第167図 6次4号竪穴建物出土遺物②

5) 5号竪穴建物 (第168図)

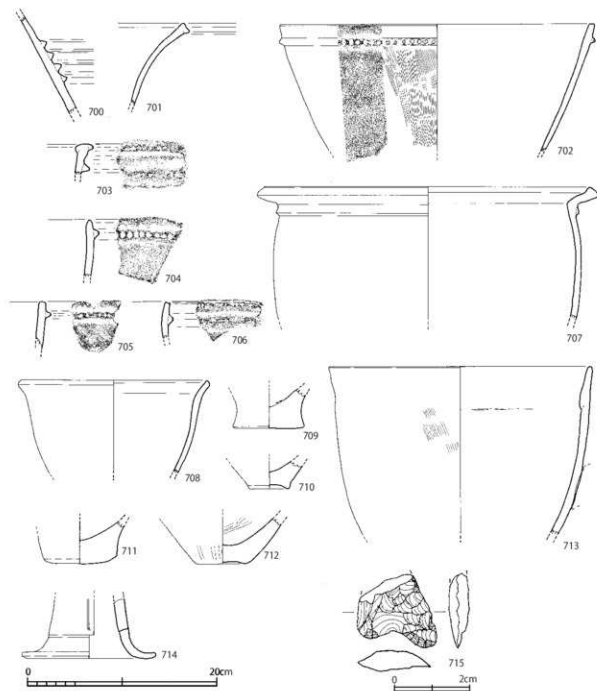
調査区南側やや東寄りで確認された竪穴建物で、4号と15号竪穴建物から切られている。南側の一辺は調査区外となる。規模は想定で東西4.85m、南北は4.70 + a mである。残存する深さは数cmである。北側壁際の西側半分から西側壁際にかけては幅0.15m、深さ0.05mの壁溝が廻る。支柱穴は四カ所で、その中央には焼土があり、地床炉と考えられる。

図示できる出土遺物は16点である。第169図700は体部上半に4条の突帯を巡らす壺、小川原式土器壺か。701は大きく開く広口壺の口縁部、702から706は刻目突帯文を一条廻らせる下城式土器壺である。707は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の壺、708は緩やかに外反して開く口縁部の小型壺、709から712は壺の底部で、平底、やや突出する底、わずかに上げ底状を呈するものがある。713は胴部中央に取っ手の剥離痕がある。口縁部は直口で、やや内面に肥厚する。底部はないが、瓶であると思われる。714は縦方向の長方形透孔をもつ高坏の脚部。裾部で大きく開く。715は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

出土遺物には弥生時代中期のものも含むが、上げ底状を呈する壺の底部(710)や突出気味の底部(711)などからこの竪穴建物の時期は後期(Ⅶ期からⅧ期)に下ると考えられる。竪穴プランも方形を呈するので、中期まで廻らない。



第 168 図 6 次 5 号竪穴建物



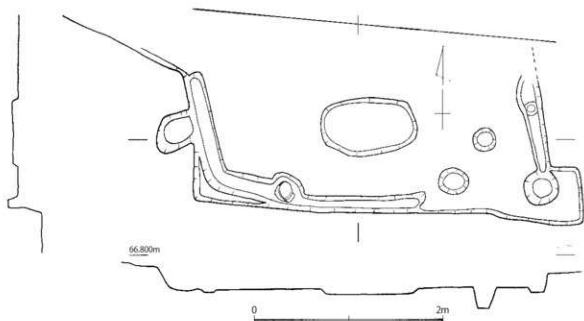
第169図 6次5号竪穴建物出土遺物

6) 6号竪穴建物(第170図)

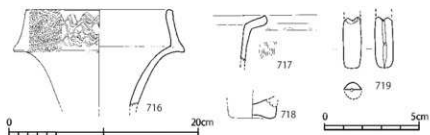
調査区北西部で確認された竪穴建物で、半分以上は調査区外となる。東西方向は3.70mで、残存する深さは0.25mである。床面壁際には、一部を除いて幅0.2m前後、深さ0.15mほどの壁溝が廻る。柱穴は複数確認されたが、主柱穴はわからなかった。また、床面では南側壁に近い部分で1.02m×0.62m、深さ0.05mの楕円形を呈する土坑が確認された。内部には炭化物が堆積しており、おそらく中央に近い調査区外に炉があり、その南に展開する土坑と考えられる。

図示できる出土遺物は4点である。第171図716は二条の櫛描波状文を施す安国寺式土器蓋の口縁部、717は胴部の張らない甕で、口縁端部がわずかに積み上げられる。東北部九州系か。718は小さな上げ底を呈する甕底部。719は碧玉製の管玉である。

この竪穴建物の時期は、716からⅦ期(後期中葉)からⅧ期(後期後葉)と考えられる。



第170図 6次6号竪穴建物



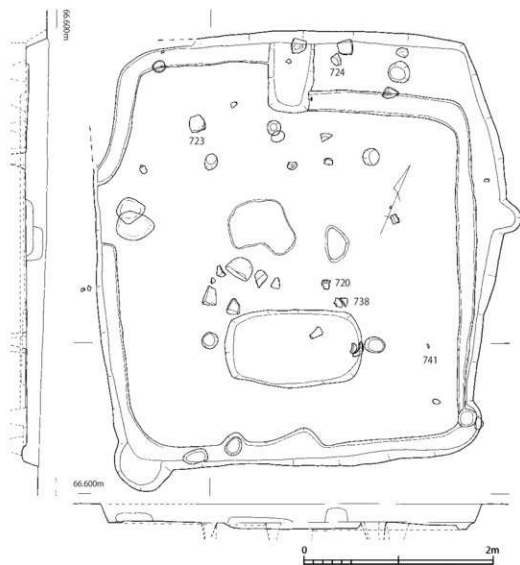
第171図 6次6号竪穴建物出土遺物

7) 7号竪穴建物 (第172図)

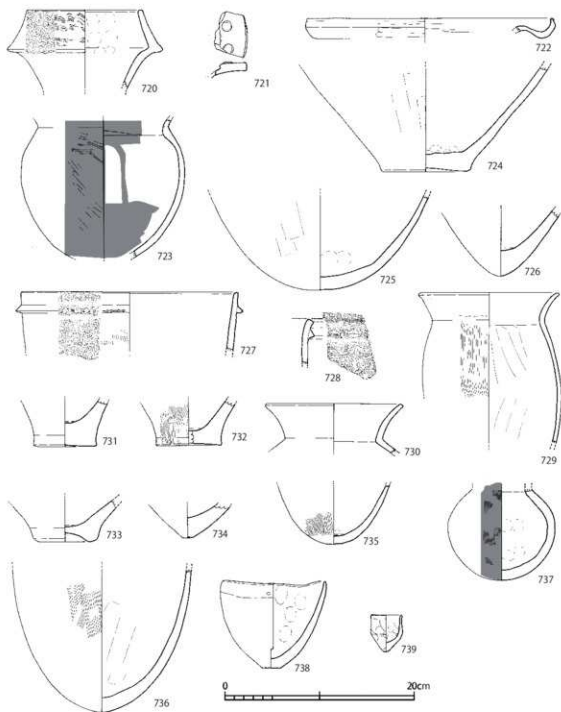
調査区西側で確認された竪穴建物で、8号と9号竪穴建物を切っている。大きさは、南北4.55m、東西4.25mで、残存する深さは0.18m程である。床面壁際には幅0.2m前後で深さ0.05mほどの壁溝が廻るが、北東角部は竪穴プランと乖離している。あるいは、建物の拡張があったのかもしれない。主柱穴は四カ所である。中央付近には焼土のブロックがあり、地床炉と考えられ、その南側の柱に挟まれた部分に、1.43m×0.82m、深さ0.07mほどの隅丸長方形の土坑がある。

図示できる出土遺物は28点である。第173図720は口縁部上半が大きく伸びた安国寺式土器壺で、三条の楊柳波状文が描かれている。721は鋤先状をなす壺の口縁部で、上面に円形浮文が付されている。722は袋状をなす壺の口縁部、723はベンガラが塗布された球形胴の壺、724から726は壺の底部である。727から736は甕で、727と728は刻目突帯を巡らす下城式土器甕、729と730は「く」字形に折れて開く口縁部、731と732は中期の平底の甕底部、733から736は後期から終末の甕底部である。737は丸底の小型壺、738は小さな平底の鉢、739はミニチュア土器である。第174図740から747は石器である。740はホルンフェルス製の扁平片刃石斧、741はホルンフェルス製の石鑿か、742は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、743は安山岩製の砥石(磨石)、744は安山岩製の砥石、745は軽石製の浮きか。746と747は姫島産黒曜石製で、746は剥片、747は石核である。

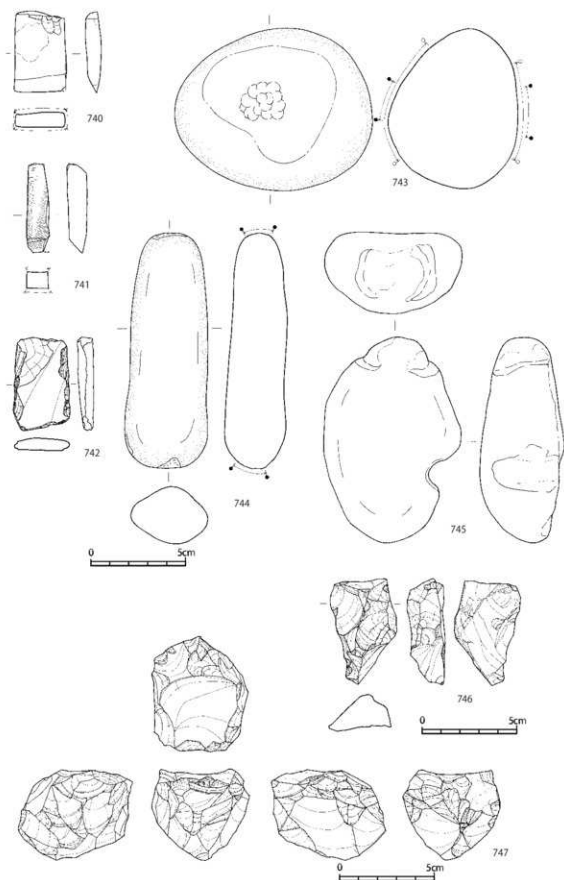
以上より、この竪穴建物の時期はⅡ期(弥生時代終末)と考えられる。



第172図 6次7号竪穴建物



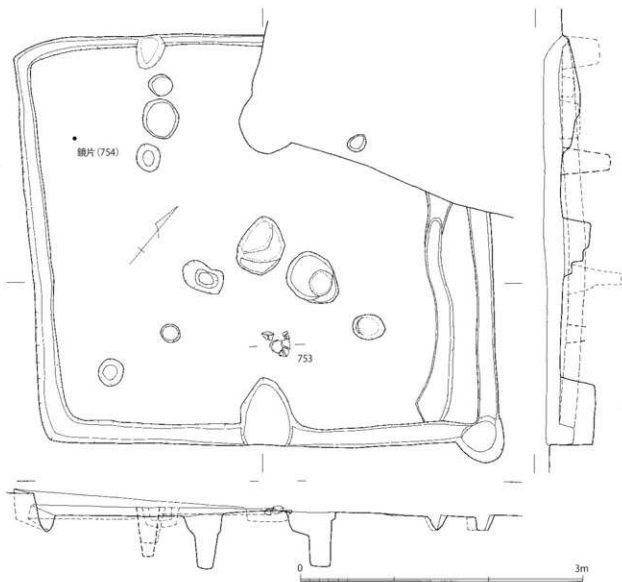
第173図 6次7号竪穴建物出土遺物①



第 174 図 6 次 7 号 竪穴 建物 出土 遺物 ②

8) 8号竪穴建物 (第175図)

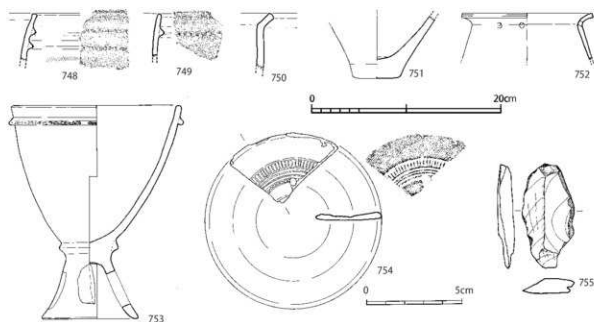
調査区の南西部で確認された竪穴建物で、7号竪穴建物に切られている。床面壁際にはほぼ壁溝が廻るが、北東の一辺は内側にも一条の溝があり、建物の拡張を示すのかもしれない。壁溝は幅約0.2mで深さは0.15mほどである。支柱穴は四カ所(内一カ所は7号竪穴建物内)であるが、中央やや南側には2カ所の柱穴があり、この建物に伴うものと考えられる。その南の壁際には0.7m×0.55mで深さ0.35mの土坑があり、内部には炭化物が堆積していた。757の脚台付きの下城式土器は、浅い皿状のピット内から出土している。この竪穴建物に伴うものではない。



第175図 6次8号竪穴建物

図示できる出土遺物は7点である。第176図748と749は刻目突帯を巡らす下城式土器甕、750は「く」字形に折れて開く甕、751は平底の甕底部である。752は屈曲部に穿孔を持つ甕、753は縦方向に長い脚台を持つ鉢で、口縁下に下城式土器甕と同様な刻目突帯文を廻らせている。下城式土器甕に脚台が付いたものと考えた方が良いのかもしれない。754は青銅製の後漢鏡片で、推定径9.3cmの内行花纹鏡である。平縁—柳歯文帯—雲雷文帯—内行花纹となる。紐に近い部分に5mm×4mmの楕円形の孔があげられている。755は頁岩製の磨製石鐵未成品である。

図示できた土器は中期のものばかりであるが、この竪穴建物の時期は、竪穴プランが方形であること、さらには後漢鏡片の出土、Ⅸ期（終末）の7号竪穴に切られていること等からⅧ期（後期後葉）からⅨ期（終末）の幅に納まると推定される。



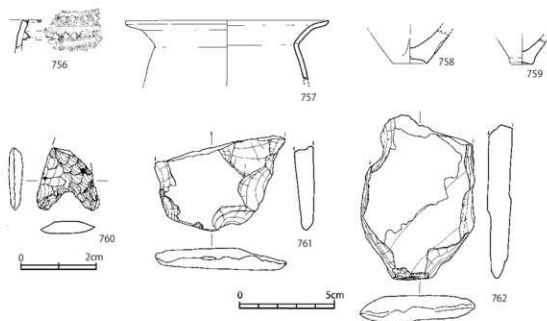
第176図 6次8号竪穴建物出土遺物

9) 9号竪穴建物

調査区の西端で確認された竪穴建物で、7号と8号竪穴建物に切られている。大部分は調査区外に広がるため、規模や形状は不明であるが、方形を基調とする竪穴であろう。

図示できる出土遺物は7点である。第177図756は刻目突帯を巡らす下城式土器甕、757は外反しながら大きく開く甕、758と759は小さな上げ底を呈する甕の底部、760は姫島産黒曜石製の打製石鏃、溶結凝灰岩製の扁平打製石斧、762は粘板岩製の磨製石斧である。

以上より、この竪穴建物の時期はⅧ期（後期中葉）と考えられる。



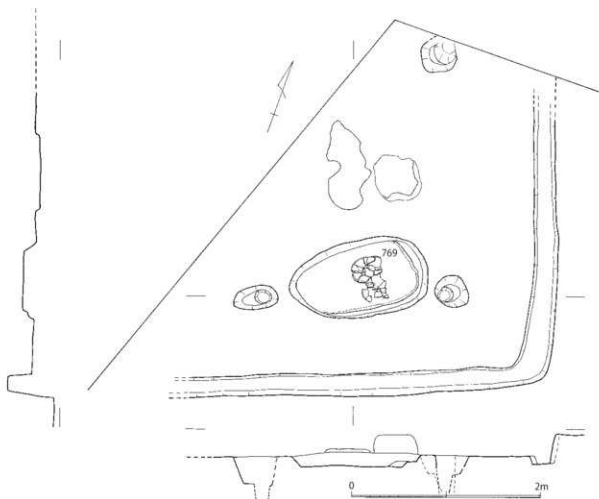
第177図 6次9号竪穴建物出土遺物

10) 10号竪穴建物(第178図)

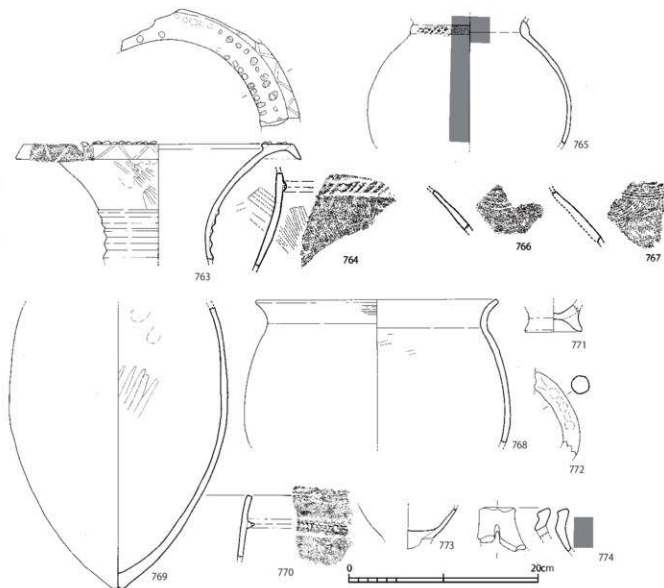
調査区北西角部で確認された竪穴建物で、かなりの部分は調査区外に延びるため、規模は不明である。残存する深さは0.21mである。検出された部分では、床面壁際には幅0.2m～0.3m、深さ0.05mほどの壁溝が廻る。主柱穴は調査区外にあると考えられる1カ所を加えて4カ所で、中央には地床炉があり、その南側には1.45m×0.80m、深さ0.15mの楕円形の土坑がある。

図示できる出土遺物は12点である。第179図763は口縁部上面を平らにし、端部を下に折ることで複合部を作る瀬戸内の影響を受けた安国寺式土器壺。上面には勾玉状浮文を2列貼り付け、側面には押圧して連続山形文を描く。764はベルト状の刻目突帯を胴部に廻らせる安国寺式土器壺である。765は「×」の刻目を施したベルト状の扁平突帯を頸部に廻らせる壺、766と767は半截竹管で平行線を描く下城式土器壺である。768は外反しながら「く」字形に折れ開く甕、769は小さな平底で、長胴の甕、770は一条の刻目突帯を巡らす下城式土器甕、771は鉢の脚台か。772は直径0.9cmの円柱状をなす取っ手、773は高坏、774は高杯の脚部である。

この竪穴建物の時期は、安国寺式土器壺のベルト状の突帯の存在から、Ⅸ期(終末)以降と考えられる。



第178図 6次10号竪穴建物



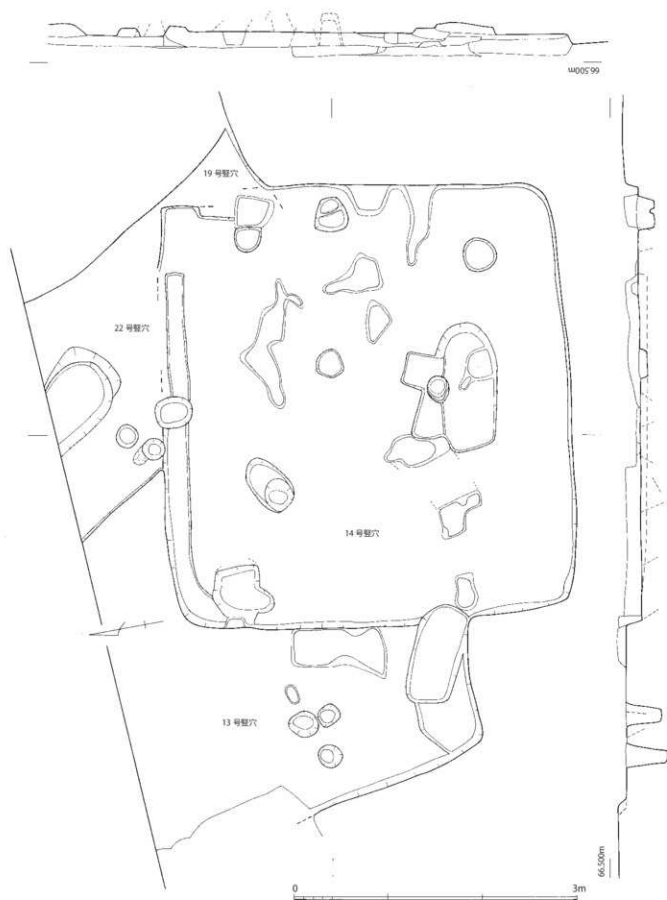
第 179 図 6 次 1 0 号竪穴建物出土遺物

11) 13号竪穴建物（第180図）

調査区北端でやや東寄り確認された竪穴建物で、14号竪穴建物に切られている。また、北側は調査区外となるため、全形や規模は不明である。残存する深さは約0.1mである。

図示できる出土遺物は3点である。第181図775は平底の甕底部、776は姫島産黒曜石製の打製石鏃、777は砂岩製の、両側先端部を尖らせている（片側は欠損）。穿孔貝であろう。

775は中期の土器であるが、竪穴プランが方形であるので、この竪穴建物の時期は後期以降と考えられる。



第180图 6次13、14、19、22号壁穴建物

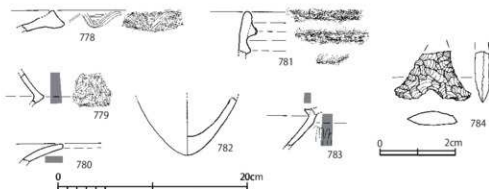
12) 14号竪穴建物 (第180図)

調査区北東部で検出された竪穴建物で、13号竪穴建物を切っている。南北4.30m、東西4.65mの方形を呈し、残存する深さは0.1mである。床面には厚く堆積した焼土がアロック状に見られたことから、焼失建物と考えられる。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴は確認できなかった。北側と南西角部付近では、幅0.2m前後で、深さ0.05mほどの壁溝が廻る。また、床面の中央やや南側には、1.35m × 0.55mで深さ0.1mほどの隅丸長方形の土坑がある。

図示できる出土遺物は7点である。第182図778は上下に肥厚させた口縁部外面に一条の櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、779はベンガラが塗布された安国寺式土器壺、780は外面にベンガラが塗布された単口縁の壺、781は二条の刻目突帯が廻る下城式土器壺、782は実底気味の丸底を呈す甕底部、783は内外面にベ

ンガラが塗布された高坏、784はチャート製の打製石鏃である。

以上より、この竪穴建物の時期はⅧ期(後期後葉)からⅨ期(終末)と考えられる。



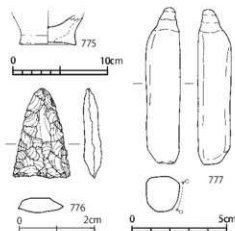
第182図 6次14号竪穴建物出土遺物

13) 15号竪穴建物 (第183図)

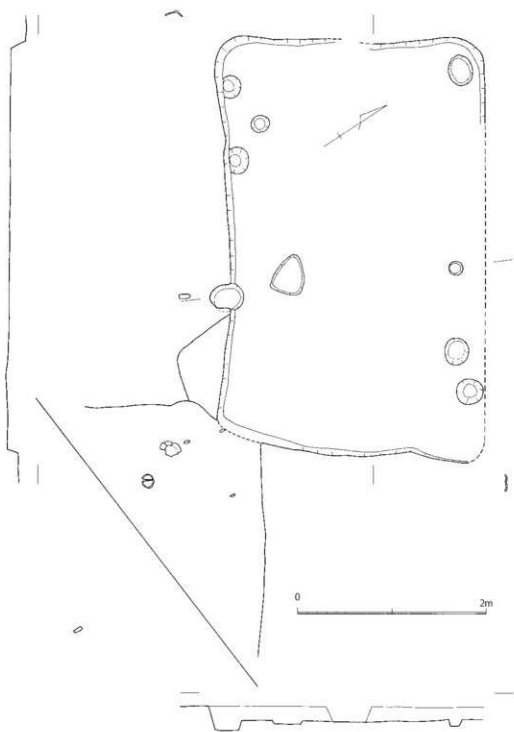
調査区東寄りで確認された竪穴建物で、5号竪穴建物を切っている。18号竪穴建物とも切り合い関係があるが、先後関係は不明である。南北2.85m、東西4.40mの長方形で、残存する深さは0.1m前後である。床面にはいくつかピットがあるが、主柱穴は確認できなかった。

図示できる出土遺物は11点である。第184図785は口縁部が動先状をなす壺、786は平底の壺底部、787は「く」字形に開く口縁部の甕、788から791は甕の底部で、平底と上げ底、やや突出気味のものがある。792はほぼ丸底を呈す浅い壺、793は丸底気味の平底を呈す、やや大型の壺である。794は粘板岩製の磨製石鏃未成品、795は磨製の磨製石斧である。

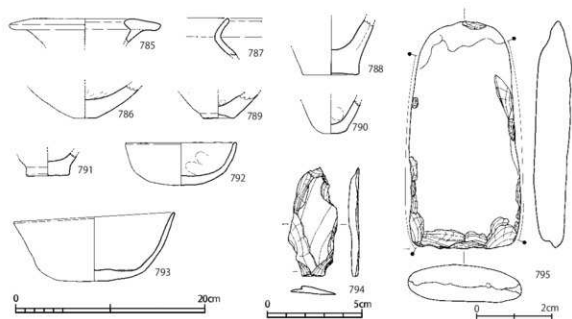
調査時の図面では、須恵器の小破片が出土したとされており、792や793の壺の存在も考えると、この建物の時期は古墳時代後期か。



第181図 6次13号竪穴建物出土遺物



第183図 6次15号竪穴建物



第184図 6次15号竪穴建物出土遺物

14) 18号竪穴建物 (第185図)

調査区東部で確認された竪穴建物である。24号竪穴建物に大部分切られており、南西角部以外は遺構はほとんど残っていない。

図示できる出土遺物は8点である。第186図796は胴部最大径の部分に三条の突帯を廻らせる安国寺式土器壺、797は鋤先状をなす口縁部の壺、798と799は平底の壺の底部、800は緩やかに外反する口縁部を持つ壺、801は口縁部が緩やかに外反して開き、底部はやや厚手の平底となる壺である。802はミニチュアの鉢。803は緑色片岩製の石剣、894は砂岩製の底石である。

出土遺物より、この竪穴建物の時期はVI期（後期前葉）と考えられる。

15) 23号竪穴建物 (第185図)

調査区北東部で確認された竪穴建物で、24号、25号竪穴建物に切られている。さらに北側は調査区外となるため、全形、規模は窺い知れない。

図示できる出土遺物は5点である。第187図805は口縁上半が直線的に外傾して開く複合口縁壺、806は口縁部が外反しながら大きく開く壺、807と808は平底の壺底部、809は小型の丸底壺である。

この竪穴建物の時期は、X期（古墳時代初頭）である。

16) 24号竪穴建物 (第185図)

調査区北東部で確認された竪穴建物で、25号竪穴建物を切っている。検出できたのは南西角部と南辺と西辺の一部であり、規模は分らないが方形基調の竪穴である。南辺と西辺壁際には幅約0.15m、深さ数cmの壁溝が巡る。支柱穴は確認できなかった。炉跡と思われる焼土が南壁際で確認されている。

図示できる遺物は5点である。第188図810は口縁上半に一条の櫛播波状文を描く安国寺式土器壺、811は一条の刻目突帯を巡らす下城式土器壺、812は上げ底状の壺底部である。813は口縁部が内湾する浅い鉢、814は口縁部が直立する浅い鉢である。いずれもほぼ丸底を呈する。

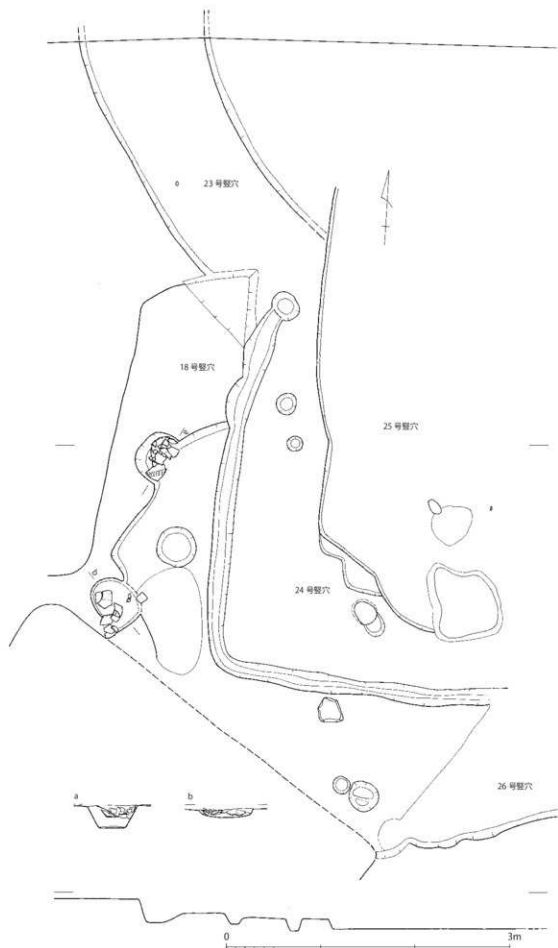
813と814より、この竪穴建物の時期はIX期（終末）からX期（古墳時代初頭）と考えられる。

17) 25号竪穴建物 (第185図)

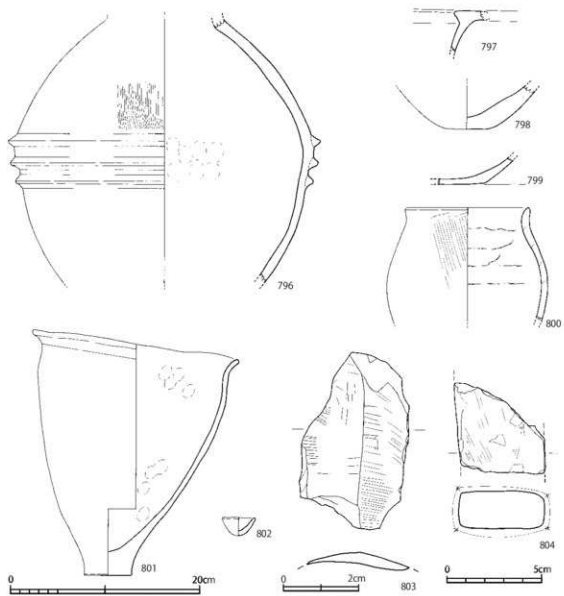
調査区北東部で確認された竪穴建物で、24号竪穴建物に切られている。東側は調査区外に延びるため、全形、規模とも不明である。床面南西角部付近で焼土が確認されている。

図示できる出土遺物は5点である。第189図815は二条の櫛播波状文を描く安国寺式土器壺、816は一条の刻目突帯を巡らす下城式土器壺、817は「く」字形に折れ開く壺、818と819は平底の壺底部である。

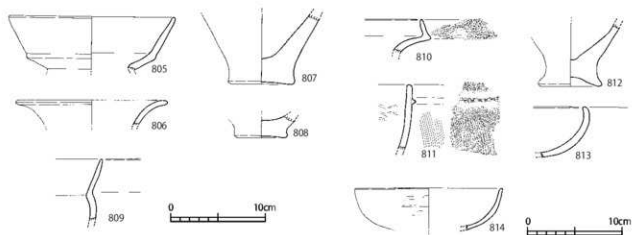
この竪穴建物の時期は、Ⅷ期（後期後葉）を前後する時期と考えられる。



第185图 6次18、23、24、25、26号窟建物

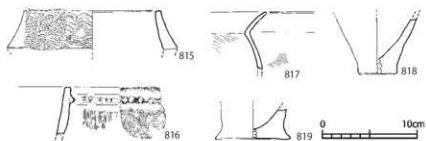


第186図 6次18号竪穴建物出土遺物



第187図 6次23号竪穴建物出土遺物

第188図 6次24号竪穴建物出土遺物



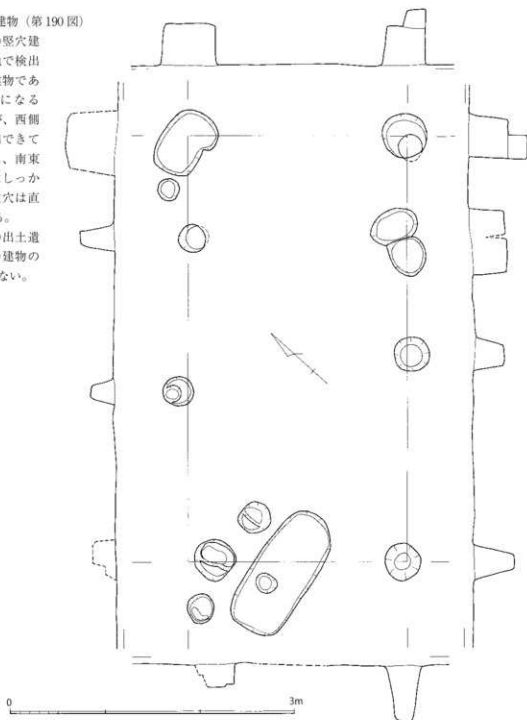
第189図 6次25号竪穴建物出土遺物

掘立柱建物

1) 1号掘立柱建物 (第190図)

調査区西側の竪穴建物が無い空閑地で検出された掘立柱建物である。1間×2間になる可能性が高いが、西側角の柱穴が検出できていない。しかし、南東側の3本の柱はしっかりしている。柱穴は直径約0.5mである。

柱穴内からの出土遺物はなく、この建物の時期は決められない。



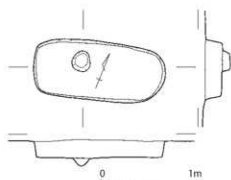
第190図 6次1号掘立柱建物

土坑

1) 1号土坑 (第191図)

掘立柱建物に重なる形で検出された土坑である。長軸1.41m、短軸0.62mの隅丸長方形を呈し、深さは0.16mである。形状から墓塚の可能性もあるが、決め手がない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

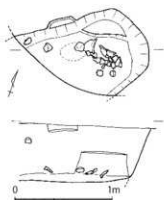


第191図 6次1号土坑

3) 2号土坑 (旧称:4号住居跡内土坑) (第192図)

4号竪穴建物的一段目の床面で検出された土坑である。幅0.85mの長方形を呈すると思われるが、南側は未掘のため、全長は不明である。深さは0.58mである。床面からは土器が出土している。堆積土には炭化物が混入していた。

出土遺物は、4号竪穴建物のところで説明した第166図684、685、687、688、690の5点が該当する。これらから、この土坑の時期はⅢ期(中期中頃)の可能性が高い。

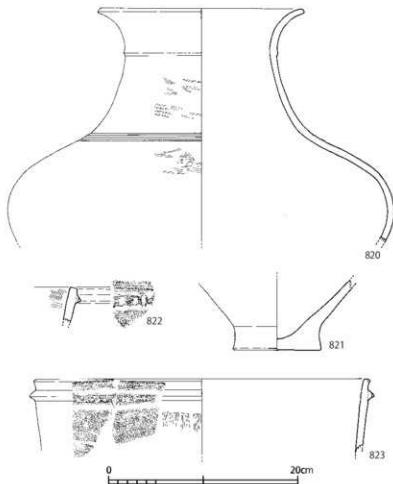


第192図 6次2号土坑

(3) その他の出土遺物

ここでは遺構に伴わずに出土した資料を扱う。第193図820から823は、調査時には「12号竪穴」として取り上げられたものであるが、最終的に遺構ではないと判断された資料である。あるいは浅い落ち込みだったのかもしれない。そのため、一括性は保たれていると判断される。820は口縁部と頸部の間にわずかな段差を有し、頸部と体部の境には平行する沈線文を廻らせる壺、821は接合しないが820の底部からもしれない。裾部がやや外側に張り出す平底である。822と823は口縁端部のすぐ下に一条の刻目突帯文を廻らす下城式土器甕である。

第194図824から第197図869は帰属が不明な資料。824と825は安国寺式土器壺で、824は胴部上部に三条の突帯を廻らせ、825は一条の突帯を廻らせ、勾玉状浮文を付す頸部である。826は半截竹管によって平行線を描く下城式土器壺、827は「く」字形に折れ大きく開く壺の口縁部、828は平底の壺底部、829から834は刻目突帯文を廻らす下城式土器の甕。第195図835と836は口縁端部を小さく積み上げる東北部九州系の甕、837から844は「く」字形に折れ開く甕で、843は内面ヘラケズリである。845は丸底の甕底部、846から849は平底の甕底部、850と851は上げ底の甕底部である。852は丸底の浅い鉢、853は長頸壺、854は脚付きの鉢か。855は平底の壺、856から858は高坏



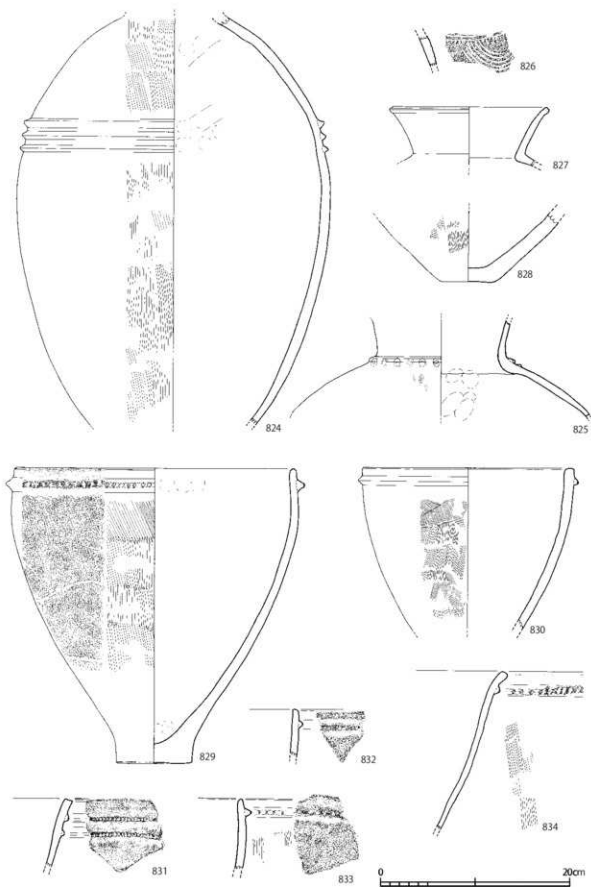
第193図 6次一括遺物①

である。

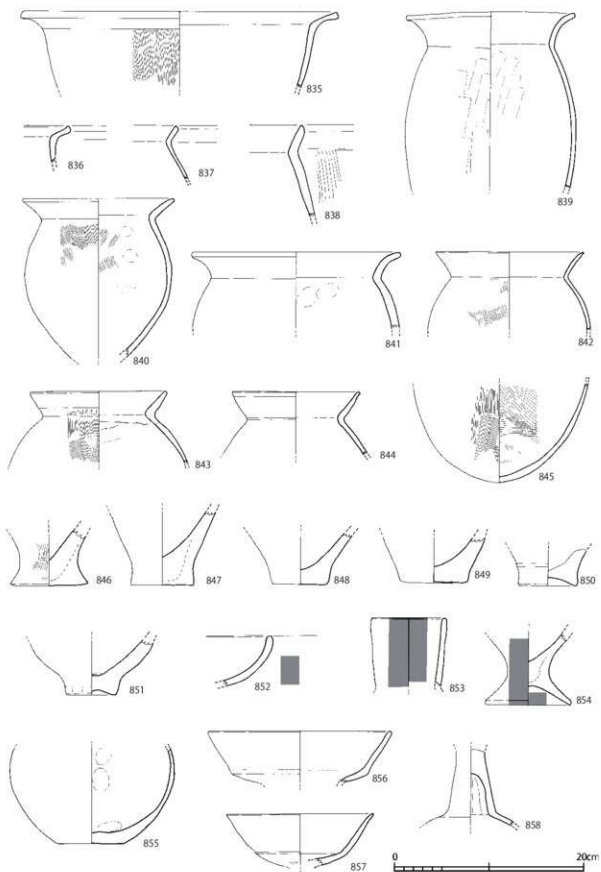
第196図859から869は石器である。859と860は緑泥片岩製の磨製石鏃である。861は砂岩製の砥石、862から864は打製石鏃で、862はチャート製、863と854は姫島産黒曜石製である。863は未成品。865はサスカイト製スクレーパー、866と867は姫島産黒曜石製の楔形石器である。第197図868は安山岩製の砥石、869は安山岩石製の敲石（磨石）である。

(4) まとめ

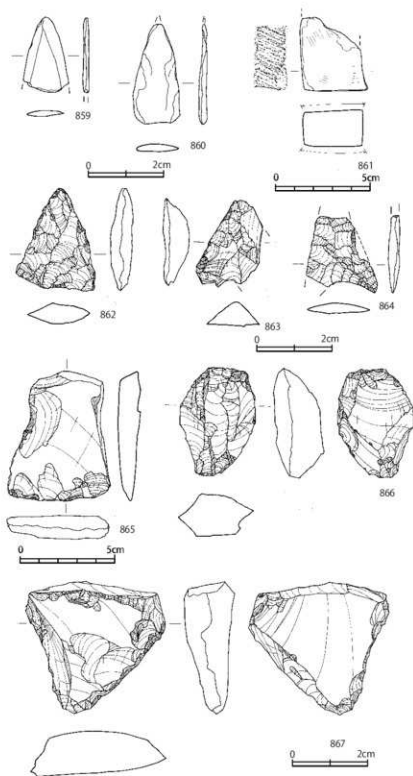
検出された17基の竪穴建物は、大部分が弥生時代後期後半から古墳時代前期に属するものであった。その中で、1基のみ古墳時代後期の可能性が指摘できたが、竈は検出されていない。その他の調査区でも、6世紀台の須恵器が若干出土しているが、竈を有する竪穴建物は検出されていない。古墳時代後期には大きな集落は形成されていないと考えられる。



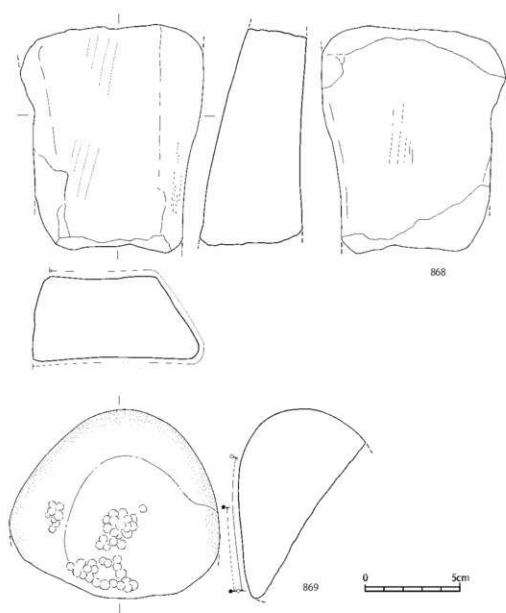
第194図 6次一括遺物②



第195図 6次一括遺物③



第196図 6次一括遺物④



第197圖 6次一括遺物⑤